

異世界迷宮で暮らして います

涼風黒兎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一攫千金求め人々は迷宮に潜る。 異世界トリップした青年も迷宮に潜る一人。

だが、目的は黒目黒髪の迷宮主に出会う事と、日本への帰還方法。 叶わなけれ

ば味噌か醤油で構わない。 シリアスな雰囲気をだしながら、緩く進む異世界迷宮物語。

小説家になろう様でも連載しています。

目次

一話	迷宮に潜る訳	1
二話	オークシチュー	4
三話	ミノタウロス	8
四話	町	14
五話	日常	19
六話	町での依頼	28
七話	仲間	33
八話	迷宮解説	39
九話	執事とお嬢様	44
十話	面倒	51
十一話	ギルドカード	56
十二話	碎ける剣	64

十三話	銀の腕	69
十四話	顛末、始まり	73
十五話	貿易都市	77
十六話	アモン傭兵団	80
十七話	武器庫	91
十八話	一区切り	98
十九話	主神とフラグ	101
二十話	受付／依頼	110

一話 迷宮に潜る訳

深遠の淵と呼ばれる迷宮、石造りの廊下、気温は低いものの近くに水脈があるのか湿度が高く、所々苔むしている。

そんな場所を俺は一人で歩いている。

目的は最下層にあると言う迷宮核だ、破壊すればダンジョンの封印、制御出来たならばダンジョンの所有権を得る事が出来る。

どちらにしても、達成出来たならば一攫千金の大仕事だ。

だが、現在の迷宮主も中々に優秀らしく、全30層と伝えられて居るが、未だに最高到達階層は14階層、つまりはかなりの強敵と言う事。

その事実にも、仲間は居ないが装備はしっかりと整えてきた。

腰には愛用の長剣に予備武器の短剣、胸当てには投げナイフ。

耐久性が物を誇る黒鉄鋼製、問題は多少重量があり、剣としては他の素材よりも切れ味が落ちると言う点。

両足は長靴に取り付け型の脚甲、左手には盾変わりの腕甲、そして胸当てと言う、基本的だが身軽な装備。

こちらは重量との兼ね合いで灰銀製だ、白銀よりは軽さと抗魔力が落ちる物の、耐久性と防御力はこちらのが上だ。

本当は魔力だけでなく、炎や氷、それどころか雷にも耐性があり、耐久性も防御力も高い竜鱗が良かったが予算の問題から見送った。

寒さ対策には膝下までである外套マントを纏っている。

外気調整に耐炎耐冷、品質保持の魔術を書き込まれた、魔蟲糸の外套であり、恐らくは装備の中で一番の高級品だ。

背負う荷物袋には武器の簡易な手入れ道具に、携帯食料。

此処までは普通の冒険者の装備と似た様な物だろう。

俺は更に、調味料各種に鍋を背負っている。

火の通りは良いが最大耐熱性の非常に高い炎霊鋼で作られた中華鍋である。

普通は武器や防具として扱うが、ドワーフの鍛冶師に無理を言って作って貰った逸品だ。

これだけ装備は整えたが、一度の挑戦で攻略しようとは思っていない。

一人で行って攻略出来るならば、既に攻略されているだろう。

迷宮の外には町が出来ている、焦らず仲間を集め攻略する気だ。

だが、深遠の淵の初回アタックは一人で行おうと決めていた。

何せ世界各地に突然現れた、黒目黒髪の迷宮主が居る迷宮。

つまりは、転生かトリップかは不明だが、俺と同じ日本人が作り上げた迷宮の一つ。俺が日本に帰る手段となるかも知れない場所だ。

最悪帰れなくても良い、迷宮特性の魔素変換で、味噌や醤油が出てくれれば良い。せめて、それを期待している。

「さて、と……行くか」

灯りが無くとも、薄暗い程度の廊下の先、地の底に続くような階段に向かって一步を踏み出した。

これが俺、やまもとひびき山本響の迷宮挑戦への始まりだ。

二話 オークシチュー

迷宮探索の出だしは上々であった。

初心者向けとも言われる基本迷宮型の5階層までは、楽に越えて難易度が上昇する森林型へと変化する6階層に初日の夜には辿り着いていた。

「此処等で飯にするか」

一人呟いて、辺りを探せば、魔物であるオークの姿を5分程で見つける。

また森林型迷宮の特徴である自生するジャガイモに、人参、玉ねぎと言った物も採取しておく。

成る程は5階層までは狼やゴブリン、コボルトと言った初心者向けとも言える魔物が中心だったが、6階層からは臂力に優れるオークなんかの魔物が、中心になるのだろう。オークは良くゲームやマンガで出て来る姿と言うより、猪が二足歩行していると言った方が正しい外見をしている。

勿論猪の様な臂力に加えて、武器を扱うだけの知性は持つ、冒険者にとって初心者卒業に相応しい相手である。

倒し方に正道は無いが、魔術には強くなく、普通の武器でもまともに戦える相手であ

る。

俺の場合は、相手に見付かる前に、距離を詰め一刀で首を断ち斬る、これが最も速く無音で出来る殺し方だ。

首を断ち斬っても多少暴れるが、血飛沫を浴びたり、手傷を追う初心者のような真似はせず、さつさと血抜きを始める。

血抜きが終われば、本来ならば熟成させるのだが、魔物の肉は熟成させずとも旨味が妙に強いので場所を変えて解体する。

今回は胸に腿をある程度切り分けて、魔素変換する。

残念ながら残りのオークは魔石にししか変換されなかった。

迷宮では常に魔力の元と言われる、魔素が循環している。

その魔素の流れに死体を乗せる事で、何らかの素材へと変換されるのだが、今回は一番良くある属性の無い魔石への変換だった様だ。

オーク程度では大した物にはならないが、強い相手——つまりは魔素を多く含む肉体を持つ相手ならば、もっと良いアイテムに変換されると言う事だ。

内心ではこの魔素変換をドロップと呼んでいる、迷宮主によって変換される物も変わるのが特徴であり、日本人だと思われる迷宮主の場合、味噌や醤油がドロップとして出現する可能性もゼロでは無い。

今回変換された無属性魔石は、魔力を引き出す事の出来る魔素の塊であるが、属性が無ければ変換に大幅なロス——10引き出して使えるのは1か2程度——が出る為に非常に安い代物だ、今日の料理の支度に使ってしまおう。

魔石から魔力を引き出し、地属性の魔術を使う。

カマドを二ヶ所作り、片方には鍋を、もう片方には燻製器を簡単にだが作る。

森林型の迷宮の場合野菜や果物を入手出来るのが利点である。

先程採取した肉に野菜を下拵えしたら鍋に油を入れ、火にかける。

勿論燻製の準備も忘れずに。

玉ねぎが餡色になった所に胸肉を投入。

材料的にはカレーを作りたいたい所だが、今回はスパイスが足りないために後日に回す。

持つて来たは良いが、余り日持ちがしない山羊の乳を鍋に入れ、小麦粉も投入、ダメにならないよう混ぜとろみを付けければオークシチューの完成である。

「うん、まあそれなりに旨い」

うろ覚えの知識から作っている料理にしては、中々上出来である。

カレーに関しては、一応自己流のスパイス配合があるのだが、流石にシチューは余り覚えて居ない。

しかし、一人分だと持ち込める調味料や食料が少ない。

情報では10階層までは森林型迷宮だと言うが、その先は砂漠型だと言う。

多量の水も必要だと言う事だ。

明日の昼頃まで探索し、町に戻る事にしよう。

そう考えを纏めて、片付けた後木の上に登り目を瞑る、迷宮では何が起こるかわからない。

休める時に休むのは、冒険者にとって鉄則である。

三話 ミノタウロス

迷宮の中は異界である。

その言葉が嘘偽り無いように、上に浮かぶ太陽が中天まで昇る頃、俺は帰還の為に歩き始めた。

辿り着いた9階層から帰還を始め、5階層の広間に入った時だった。

向かい側にあつた筈の広間の入口が無くなっており、入ってきた通路も振り返れば石造りの壁で塞がれていた。

迷宮主は侵入者を監視している、その言葉を思い出したのはそんなタイミングである。

広間の中心が輝き、地面から牛頭の魔物が生えてくる。

ミノタウロス、ギリシャ神話に於けるミノス迷宮の主だが、それとは関係無く迷宮に発生する上位の魔物。

正確に言うならば、今回は明らかに迷宮主によって生み出された魔物、間違い無く監視されていると言う訳だ。

しかも冒険者ギルド内で、七段階に分けられる魔物の階位の内、4階位に属する強敵

の魔物。

1 階位はゴブリンやコボルト等、単体ならば腕自慢の村人でも狩れる魔物。

2 階位はオークや、軍隊レベルになったゴブリン等、初心者卒業するレベルの冒険者が複数で討伐する魔物。

3 階位はオーガ等、膂力が非常に優れた魔物や、ガーゴイルやゴレム、ウエアウルフ等討伐する知識が必要な魔物でベテランの冒険者ならば単独討伐が可能な魔物。

そして4 階位、ベテランの冒険者が複数必要な魔物であり、ミノタウロスも此処に属する。

5 階位以上は基本的に単独で戦う魔物では無い、勿論ながら単独で討伐するような化け物染みた連中も居るのだが、それはまた別の話。

「くそ、全くついてないな……っ」

悪態を吐き出す、間違いないく単独で戦う相手では無いのは、間違いないのだが、俺では破壊不可能な迷宮の壁に囲まれた時点でやらざるを得ない。

「勇者だとか英雄だとか名乗るような連中に相手させろよな……」

先手必勝と言う事で、全身を現したミノタウロスに向け、隠しの投剣を放つ。

狙ったのは目だが、振るう腕で簡単に弾かれる。

だが、それで良い本命は一気に距離を詰めた上での一刀。

「う、も、お、お、お、お、お!!」

一撃の元に、右足の腱を断ち斬られた痛みにも、咆哮をあげる。

その大音声は衝撃波を生み出し、俺の身体を吹き飛ばす。

それはこの世界に有る限り、影響を逃れられない能力値ステータスと技術スキルの力。

まるでゲームの様だが、この世界にはステータスがあり、値が高い程人智を越えた力を振るう事が出来る。

勿論ながら、俺が一足跳びに距離を詰める事が出来るのは、この能力値の力である。

恐らくではあるが、衝撃波を生み出す咆哮はこのミノタウロスに迷宮主によって付けられた先天技術だと思われる。

先天技術と修得技術、読みこそ両方スキルではあるが生まれ持つ物と会得する物、大きな違いがある——が、それは今考える事では無い。

【衝撃】か、【衝撃咆哮】のどちらかの先天技術があるのだろうか、初手で気付けたのは大きい。

衝撃波で跳ぶのはともかく、防げない状況でダメージを受けるのを防げるからだ。

「ミノ助が持つのは——【筋力増加】に【耐久増加】、それに【激昂】辺りだったか、んで追加が【衝撃】か【衝撃咆哮】に【上級迷宮武器】、下手すると【再生】系もあるな……大盤振る舞いだな」

体勢を整えながら、改めてミノタウロスを見る。

足の腱を切ったにも関わらず、ダメージが無いかの如く、こちらに歩いて来るその手には、巨大な戦斧が収まっており、上等にも胸当てなんぞを身に付けている。

普通に生み出されたミノタウロスならば、良くて棍棒に腰ミノ程度である事を考えるならば、迷宮主によってかなり強化されているミノタウロスなのは間違いが無い。

「ちいとばかし、本気出さないと駄目っほいな」

迷宮主に力が知られる以上に、ミノタウロスの肉が食えなくなるのも問題である。

ミノタウロスはオークなんかと違い、相当上質な牛肉の扱い。

滅多に出会えないし、狩れないのだが……流石に命のが大事だと割り切る。

「悠長に歩いて来るなら一撃必殺、貯めたゲージ消費技だ——」

この世界は世界法則以上に個人の資質が重要である。

世界法則はRPGなのだが、どうも俺の資質、あるいは先天技術は格闘ゲームあるいは横スクロールアクションだと言う事。

「一撃必殺——本日の十割・天を割る一撃」
フェイタルキリン

一足、間合いを詰め上段からの信仰する神の力——生命を断つ死の一閃。

ミノタウロスが上げ損ねた戦斧の柄毎その身体を真つ二つに断ち斬る。

何処からか『フェイタル・K・O.』と声が響いて真つ二つのミノタウロスの肉体は光

の粒子となる。

俺の放った技は一撃必殺技ではあるが、チートでは無い。

確かに当たれば一撃必殺と言う馬鹿げた技ではあるし、体力ゲージもフルで打てるが——格闘ゲームをやる人間なら判ると思うが、所謂浪漫技、初見殺し……あるいはわからん殺しである。

格ゲー風に言うならば下段ガード不能、ガード後確定カウンター、十割ダメージ、削り無し7ゲージ消費技、と言った所か。

解らない人の為に言えば7本ある必殺技ゲージ全て使った上で、立った状態で刃を防御されなければ一撃必殺、防御されたら殆どの反撃を受けると言う技だ。

ちなみに必殺技ゲージは俺の感覚で理解出来て、相手が強い程貯まりやすく雑魚を相手に貯めるならば、一日で一本溜まるかどうかである。

そして、ミノタウロスが消えた理由だが、この系統の技で殺した場合、強制的に魔素変換されると言う謎の特性を持っている。

強制魔素変換によって出てきたのは魔石、しかも無属性。

大きさはそこそこあるが、二束三文の代物で。

拾って、気付けば開かれていた広間を抜けて地上を目指す。

町で何かしら食事をするとしよう。

四話 町

ガヤガヤと五月蠅い通りにある屋台通り。

店先に幾つかのテーブルがあり、その一つに座って安い粥を啜る。

時折俺の装備を盗もうとするこそ泥には、拾っておいた小石をぶつけ追い払う。

此処は迷宮深遠の淵に一番近い、名前の無い町。

噂では迷宮主によって作られたとか、人の姿を取る魔物が住んでいるとか、神様が信仰を集めているとか、異世界から来た勇者が居るだとか。

全て事実である。

月に一度発行される新聞には迷宮主からの今月のお勧め魔物と言う記事や、迷宮主が推す売り出し冒険者なんて記事が載るし、今食べている粥は目には毒だが人畜無害なスライム娘が売っている。

町の広場では、神様の一柱が有難い説法を説いているし、冒険者ギルドでは地球からの召喚勇者が雑用依頼を請けている。

つまりは何でもありな町だと言う事だ。

名前が無い理由は、迷宮主が付けるのを面倒臭がったとか、誰も正式名称を呼べな

いだとか、名前公募しているが誰も出さないとかわかれて居るが、そこだけは不明である。

調べようとしていないだけだ。

迷宮主は会いたくないならば、迷宮を攻略しろと言っており、配下の魔物達曰く、町中での姿を見掛ける事は無いらしい。

目的の為にはやはり迷宮攻略が第一だと言うのは判っていた。

腹を満たした俺は、今回の戦利品を換金しに冒険者ギルドに来た。

テンプレ通りのギルドで絡まれる事態と言うのは、時折あるが大体はヤラセである。

それはさておき、換金する際に受付嬢にギルドカードを更新しろと言われる。

恐らくは拠点を移す前に更新した情報では、駄目だと言う事だろう。

完全中立な立場で、現代日本も真つ青な程の情報保護を誇る冒険者ギルドなので、素直にギルドカードを提出する。

直ぐに返って来たギルドカードを見る。

ヒビキ 種族：人間 ギルドランク：B

筋力：48 / D + 耐久：31 / D - 敏捷：73 / B

魔力：27 / E + 精神：41 / D 信仰：39 / D

器用：62 / C + 感知：66 / B | 幸運：47 / D +

ランク：D +

スキル

【異界資質：格闘】【上級剣術：5】【投擲：4】

【料理：3】【全魔術無効】【鑑定：4】【軽業：6】

ステータスについては詳しくは説明しない、見たままだからだ。

ただ、一般人の能力値は10程度であり、ベテラン冒険者の得意能力値で40程度だと伝えておけば分かりやすいのでは無いかと思う。

スキルに関してだが、スキル名の後に数字が書かれているのが修得技術、書かれていないのが先天技術である。

修得技術の後に書かれている数字は、熟練度であり7を越えると上級のスキルに変化する。

俺の場合で言えば上級剣術のような。

変わって先天技術は熟練度が表示される事は無い。

生まれつき、そのスキルを極めているからであるらしいが、中には先天技術として普通に修得技術として覚えるスキルを持つ者も居るらしい。

そして、スキル表示されるのは7つまでであり、実際に効果があるのも同じく7つで

ある。

実際には修得しているスキルもあるが、入れ換える為には莫大な予算か、専門のスキルが必要である。

さて気になる換金額ではあるが、サイズの問題か意外とミノタウロスのドロップが高く、小銀貨二枚大銅貨四枚となった。

この世界、非常に貨幣や数字の計算が面倒である。

普段の数字は十進法だが、重要な部分では七進法、貨幣の計算に至っては全くの謎である。

まず金銀銅にそれぞれ大中小で九種類ある。

小銅貨が一番安く、大金貨が最も高い。

小銅貨十二枚で中銅貨、中銅貨三枚で大銅貨。

価値としては、大銅貨一枚あれば、三食食べれる額である。

大銅貨七枚で小銀貨、小銀貨四枚で中銀貨、中銀貨十五枚で大銀貨。

価値は銀貨があれば最低でも一週間は宿に泊まれると言った程度だ。

大銀貨八枚で小金貨、小金貨十四枚で中金貨、中金貨十枚で大金貨。

価値はもはや不明、魔術道具等は最低でも金貨である。

まあ、今回の換金額は二週間程宿でゆつくり出来る額だと言う訳だが、いざという

きの備えには足りない。

この世界、理不尽な事に迷宮で死んでも死体を持ち帰れば生き返る事が出来る、但し魔素変換によって能力値の大半が失われる。

まあ、某3Dダンジョンゲームよろしく、絶対では無いし、莫大な金をぼったくるのだが。

しかし、いざというとき運んで貰うパーティーメンバーを探さねばならない。

ダメ元で受付嬢に聞いた所によると、現在前衛のメンバーを探している者が居るらしいので会う事にする。

生産活動を行える者らしく、依頼を完了したら伝えてくれると言うので常宿としている店の名を伝え、今日は一先ず宿に向かう。

一人で迷宮攻略を目指している訳じゃ無い、会うのが楽しみだ、気の合う奴だと良いんだが。

五話 日常

町に戻った翌日、初めてのダンジョンアタックに出る前、準備している間も常宿にしていたドワーフとエルフの友人二人組が経営する宿、運命の歯車亭の二階、一番安い一人部屋で目を覚ました。

今日の予定は少なからず消費した消耗品の補充に、ギルド以外での仲間の搜索。

普段着に着替え、腰に長剣を提げ、ギルド章の付いた腕輪を右腕に着ける。

ギルドカード以外での身分証の一つだ。

町の中ならば、そんなに必要無いのだが、厄介事に巻き込まれて身分証が無いのも困る。

ギルドカードの場合は普通であれば、隠すべき能力値や技術が常に表示されているので、町中の冒険者にはこの様なカード以外の身分証が好まれている。

「おはようヒビキくん、朝食かい？」

下に降りた所で宿の主の片割れ、エルフのデイルさんに声をかけられる。

「あー……朝食はパスで、ソロで潜ったから余り稼げて無いんですよね」

今回俺は素泊まりで取り敢えず一週間分先払いしている。

つまり、宿で食事をする場合別料金がかかる。

消耗品の補充も考えると、余裕は無いので何らかの町中でこなせる依頼も視野に入れなくては。

「そうか、僕らは君ならツケでも良いんだが？」

「後が怖いんでやめときますよ」

表向きには非常にありがたい提案に苦笑して、宿を出る。

運命の歯車亭のツケ、それは代償として恐ろしい事態を引き起こす。

その惨劇に巻き込まれない為に俺が取ったのは戦略的撤退だった。

「よう、アリーシャ」

逃げ出した俺がたどり着いたのは、馴染みの錬金術師の店——とは言っても露天だが

——に来て、店主の少女に声をかける。

「……珍しい」

口数の少ないキャスケットを常に被るジト目少女、錬金術の先天技術を持つ冒険者だ。

彼女は回復薬以外にも爆薬、あるいは調査調味料等も取り扱っている。

「ようやく一回目のダンジョンアタックが終わったからな、消耗品補充だ」

彼女の言った珍しいとは、『準備を整えていた間毎日の様に冷やかしていたのに二、三日空けて来るなんて珍しい』の略だと思われる、多分そこまでは外していない。

「買え」

彼女が俺に、三本の試験管に入った薬品を差し出してくる。

三本中銀貨二枚と値札が貼られている。

「いや、そんなに金無いから」

「ツケ」

首を横に振った俺のポケットに無理やり試験管を入れてくる。

宿とは違い、強制的にツケさせられたらしい。

彼女は彼女で、ある程度問題はあるが、恐らくは生還した祝いと言う事だろう、蘇生代には最低でも金貨な訳だから。

「トイチ」

「そんな金ねえよ……」

苦笑しながら試験管をポケットから出す。

「冗談、ある時払い」

「了解、ついでに調味料を頼む」

剣帯の薬品入れに差し込みながら、少女の取り出す調味料を選んだ。

気付けば昼過ぎ、アリーシャと別れた後屋台で昼食を摂ろうと屋台通りまで足を伸ばす。

馴染みになっているスライム娘のスラちゃんが営む屋台で粥を頼む、今日は魚の干物入り。

「グー……」

口を付けようとした時に、そんな言葉と不穏な視線を感じて横目で見る。

近くの建物の陰からこちらを覗いているのは、純白の衣に金糸の刺繍と言うファンタジーな服装ながら、腰まで届く様な黒髪で黒目の和風美少女の姿、但しまな板。

「あー！ 今不穏な事考えましたね！ 私非常に傷付きました、謝罪としてそのお粥を所望します！」

「……珍しい所に居ると思つたら、曲がりなりにも信者から昼飯奪おうとするなよ」

粥を要求するこの少女は、普段中央広場で説法をしている女神の二柱、まな板だが。

「また不信心な事を考えましたね！」

俺の心を読んだ上で、昼飯の粥を奪おうとしているこの少女は数多に存在する神々の中でも、大神八柱あるいは八大神と呼ばれる内の一柱、生命と死を司る女神タマヨリ、おそらくだが漢字で魂依では無いかと密かに考えている。

「信徒を名乗るならば私にその粥を捧げ私を崇めるのです！」

一応ながら、俺が信仰する神でもある。

信仰による恩恵は再生力の向上、肉体回復系の魔術、攻撃系の魔術として、回復反転だの即死魔術だの物騒な魔術が揃っている。

ただ、俺は先天技術からか、回復系の魔術を使えないので、信仰する義理は半減している。

だが、ミノタウロスをしとめた必殺技はタマヨリの力を借りて使用しているので、全くの無意味では無い訳だ。

「しゃあない、スラちゃん粥もう一杯頼むわ」

苦笑しながらスラちゃんに頼む、折れるのは判っていたのかすぐに粥の椀が出される。

「よきにはからえ！」

「それじゃ王様かなんかじゃないか？ 今日はどうちだ？」

椅子が高くて座れないタマヨリを持ち上げた所で「ひざー！」と元気な声を出す幼女神様を俺の膝に乗せる。

信仰しているだけあって、タマヨリの事は嫌いでは無い。

木で出来た匙を一生懸命動かして、はぐはぐと粥を食べている姿に癒される、俺は口

リコンでは無い、良いね？

偉ぶっているが、実際には生命の神として生きとし生ける者達を慈しみ、なおかつ生命の終わりである死も司る彼女は、全ての生き物と仲良くしたいと考えこの姿で顕現している……と言われる。

話を聞いた時に、目がバタフライをするくらいに泳いで居たので、八割以上の確率で嘘だが。

仲良くする中でも、何故か俺は気に入られており、町に居る時にはこうやって引っ付いてくる。

名前も呼び捨てで良いと言われる程だ。

「タマヨリ様！」

後方から聞こえてきた透き通る声。

「むー！ いかん、私は逃げ……離さんかヒビキ？」

「顕現している以上、仕事はしような？ それにまだ粥が食べ掛けだろ」

逃げ出そうとしたタマヨリの脇を掴んで、逃走を防ぐ。

たまには休むのも良いだろうが、人の奢りの食事を残すのは許さない。

「ヒビキ殿、助かったで御座るよ、さあタマヨリ様説法のお時間で……」

駆け寄ってきたのはリンデと言うエルフ。

御座る言葉なのに、タマヨリの聖印を刻んだフルアーマーと言う、聖騎士の称号を持つ者。

「リンド、タマヨリはまだ食事中だ、判るな？ 俺の奢りの食事だ」
につこりと笑って言う。

理解してくれたのか、凄い勢いで頷いて待つてくれるらしい。

タマヨリまで凄い勢いで頷いたのは不思議だが。

食事を終え、タマヨリ達と別れた後はギルドに向かう。

今日中の仕事は無いだろうが、仲間が見付かるまでの仕事を見に来た。

ギルドは良くあるテンプレ的な作りになっていて、入って正面が受付、左手側が各ラックに別れた依頼掲示板、右手側がテーブルが置かれており、酒場となっている。

もうすぐ夕方だからか、早めに仕事を終わらせてきた冒険者達が酒盛を始めていた。

そんな中に、一人だけ静かに木製のカップを傾けている人物が居た。

日本人の勇者の仲間であり、この世界の勇者の一人である。

この世界には神々が実在し、それぞれのお気に入りを勇者としている、更に偉業を成し遂げた者を、血筋により認められた者も勇者と呼ばれる。

冒険者ギルドでは勇者ランキング何て物も表示される位だ。

「ようモモ、もう戻ってたのか」

顔見知りの勇者、ヨトの血筋により勇者と呼ばれる彼女、モモⅡヨトに話しかける。

「はっ」

微笑み返事を返してくる少女。

血筋の呪いなのか、表情はアリーシャより良く動くが、はいかいいえしか喋らない。

あるいは喋れないが正解だろう。

「あれ、ヒビキさん戻ってたんすか？」

酒盛の中から逃げ出して来た少年が、俺を見て声を上げる。

「おう、今回は様子見だったからな」

軽く手を上げて挨拶を返す。

日本人であり命の神タマヨリの勇者、みょうほういんゆうま妙法院悠間である、皆ユーマと呼ぶ。

口調こそ軽いが、元々良いとこの生まれなのだろう、この世界では15から可能だと
言われている飲酒を逃げる元高校生だ。

「なら、明日辺り一緒に潜りませんか？」

「ギルドに仲間の幹旋頼んでるからなあ、その連絡待ちだな」

「そっか、それなら町中の仕事つすか？」

「おう、今明日何かありそうか見に来た所だ……ん？」

と、掲示板の方を向いた所で袖を引っ張られる。
モモである。

「どうしたんすか？　ははあん、さてはヒビキさんと一緒に仕事したいんすね？」

ぶんぶんと首を縦に振って、満面の笑みを浮かべる。

「ん、じゃあ明日は休みにするっすか、自由行動っす」

「簡単に決めて良いのか？」

あまりにも簡単に決めてしまったので、真意を問う。

「全然構わないっすよ、俺も行くっすから」

一応勇者としてパーティーのリーダーだった筈なのだが。

ギルドで明日の事を軽く話し合い、運命の齒車亭に戻って来れば、こちらでも冒険者達の宴会である。

顔見知りの連中に挨拶して部屋に戻る。

「まあ……向こうに居た時より、充実してるよなあ」

ベッドに横になってしみじみ呟く。

明日は町中の仕事だ、早めに休むとしよう。

六話 町での依頼

天気は快晴、絶好の冒険日和である。

今回町中と言いつつも、近隣の迷宮外へ出現した魔物討伐の依頼に集まったのは、俺とユーマとモモ、それにユーマのお気に入り、ヨシユと言う斥候職の冒険者だ。

ヨシユはこの町では珍しい新人冒険者の一人である。

新人冒険者が少ない理由は単純に、迷宮の難易度が意外と高く評価されており、町の周りに現れる魔物も最低3階位と言う、腕が立たなければ稼げ無い場所だからだ。

そして新人としてヨシユが居る理由は、この町で冒険者登録をした元魔物——迷宮主曰く、迷宮や町の周りで敵対するのが魔物で、町中に居る様な敵対しない者は元魔物らしい——の冒険者だからだ。

流石にこの世界自体が色々緩いと言えど、魔物が冒険者活動出来る場所は限られている。

そして気に入られている理由は単純、ヨシユは1階位の魔物、二足歩行する犬の姿——宮〇ホームズと言えば分かりやすいだろうか——をした魔物、コボルトの冒険者だからである。

ユーマだけならず、愛くるしい姿で純朴な性格故に、町の冒険者達のマスコットと密かになっている。

今回は前からユーマのパーティーメンバー内で企画されていた、中々レベル上げを出来ないヨシユのパワーレベリングも兼ねた金策と言う訳だ。

元が犬の魔物らしく、嗅覚や聴覚が鋭く、リーダーへの忠誠心も高い、元来持つ爪や牙だけでは無く、小型に限られるが武器の扱いも上手い。

元1階位の魔物とは思えない実力だ、だがそれでも2階位程度で、未だ3階位を相手に出来る程では無い。

閑話休題。

俺達が請けたのは、町の近郊に出現した魔物の討伐及び、素材の回収。

対象はアラクネ、地球の神話のどれかにも出て来た蜘蛛の魔物である。

だが、このアラクネ地球からの来訪者——特に男から——にはラミア、ハーピーを加え、がっかり三大魔物と呼ばれている。

迷宮主が造り出した存在ならいざ知らず、自然発生した魔物では、ただひたすらに巨大化した蜘蛛である、勿論魔素により巨大化だけでは無く魔術を操る個体等も居る訳だが。

ラミアは巨大化した蛇、ハーピーは分類が分からないが鷲の一種が巨大化した魔物だ

と言われている。

さて、このがっかり三大魔物のアラクネではあるが、素材は非常に有用であるがその実力は3階位、数が居て、巣で待ち構えて居るならば4階位とも言われる程に高い。

迷宮内と違い、地上では魔素変換が出来ない為に死骸による移動制限や、整えられていない自然の環境から、強敵ではある……が、俺は手段を選ばないならば神すら一撃に切り捨てて男、と言いたいのがゲージも無いのでシンプルに切り捨てて行く、苦労はそれほどでは無い。

ユーマは神の勇者だけあつてチート持ち、刀術と生命の魔術を駆使して苦戦するまでも無く、アラクネを屠って行く。

モモに至っては、単独で魔王と呼ばれる魔物の王を討伐する程の実力を持つ、と言われる噂が事実だろうと思う程の剣の冴えを見せる。

実際には剣閃が疾つたと思えば辺りのアラクネと巣がバラバラになっている、と言つた様子だ。

こんな三人に囲まれているせいで、結局ヨシユは索敵だけが仕事となつてしまつていた。

さて、アラクネの素材ではあるが、蜘蛛と言う所から判る様に主に糸である。

巣に使われている糸だけで無く、まだ液状の糸袋も素材となる。

もう一つの素材は、蜘蛛脚である。

分類は食材であり、滋養にも優れ、味も素晴らしい食材……なのだが、流石に地球からの来訪者には不評な食材だ。

味としては本当の蟹を使ったコクが素晴らしいカニクリームと言った所だ。

以前そのまま中身を解してコロツケ風にした料理人が居たが、一世を風靡したが蜘蛛だとバレた瞬間に客の大半——懐かしさから食していた来訪者——からブーイングを受け潰れた。

流石に人気のあった料理人を潰されたのは大事だったのか、あるいは当時流れていた王族が蜘蛛コロツケを気に入っていたのが事実なのかは知らないが、煽動した来訪者の女性は未だに牢に入っていると言う。

「ヒビキさん、ヒビキさん……そろそろ戻って来てくれないっすか？」

ユーマが呆れた声で俺を呼ぶ。

「なんだ、問題でもあったのか？」

蜘蛛脚から派生したコロツケ騒動を思い出しながらも、集める手は休めて居なかったのだが。

「今から町戻ると微妙な時間になってしまうので、此処でご飯食べてから戻りましょうなので」

と、ヨシユが説明をしてくれる。

微妙に不思議な言葉づかいをするが、そこが良いと言う者が多く直される気配は無い。

「飯は良いが、食材は蜘蛛脚か？ 調理器具は持ってきて無いぞ？」

今日は長剣に解体用のナイフ、ブーツからも脚甲を外して、身に付けているのは左手の小手だけと言った簡素な装備。

ユーマにモモも似た様な物で、大した装備をしていない。

「えっ持つてきて無いなので？ ヒビキさんは何時も持つてる気がするなので」

唯一ガチガチにフル装備のヨシユが言うが、彼の役目は斥候、大がかりな装備は持つていない。

「モモは何か持つて無いっすか？」

「いいえ」

残念そうに首を横に振るモモ。

少し話し合うが、飯は町まで我慢し、取ることにしよう結論が出た。

勿論、食材として見ている俺達が蜘蛛脚を確保しておき、食堂で持ち込み調理してもらったの言うまでも無いだろう。

七話 仲間

アラクネ狩りの翌日、報告はユーマ達に任せただけで報酬を受け取りにギルドに行けば、仲間を募集していた者が来るとの事で、珍しく昼前からギルド併設の酒場に居座る事になっていた。

ギルド併設の酒場は、主にギルドに依頼を報告し報酬を得た後で酒を呑む者達がメインの客層だ。

だが、昼夜問わずに営業自体はしており、職員の仕事や俺の様な待ち合わせ、迷宮へ潜る前の打ち合わせ等にも席を貸している。

昼夜問わず呑んでいる連中は居るが、ギルド本部所属の仕込みの冒険者であり、外見や雰囲気からまだ早いと思われる冒険者への警告の為に居ると言う役目だ。

なお、この業務——業務扱いになるが、大抵は半日呑んでいるだけで終わる——は時折、一般の冒険者にも振られ、大人気の仕事である。

さて、ギルド側でも理解しているだろうが、俺の欲しい仲間は斥候職、攻撃魔術職、運荷職^{ポーター}辺りだ。

普通の冒険者ならば、これに加えて回復魔術職^{ヒーラー}あるいは、神職^{プリースト}辺りを欲しがらるのだろ

うが、俺の場合先天技術として全魔術無効があるせいで回復魔術は元より、神の力を借りた神聖術と呼ばれる奇跡ですら、効果が無い為、ある程度の人数——迷宮攻略に適している——と一般的に言われる六人編成等——居ない場合は役割が無い。

つまり、現状連れて来られても困ると言う事ではあるが、基本的に回復職は不足している為まあ大丈夫だろうとは思われる。

ちなみにはあるが、攻撃系の魔術に関しては、『直接の魔術効果』だけで無く、巻き上げられた礫等の『魔術により発生した副次効果』すら無効化する。

副次効果に関しては、何処までが無効化出来るのか、不明瞭ではあるが、魔術に対してはほぼ無敵と言って良いだろう。

ただし、魔術を自分で扱えない——正確には、自分の魔力が一切扱えない——と言う欠点も存在する訳だが。

魔石を砕けば、魔術を扱う事も出来る訳だ。

ギルド内にある時計が12時を指し、俺がエールの三杯目を待っている時、漸く待ち人が来た。

見覚えがあるどころか、一昨日会ったばかりの人物である。

「……確かに後衛で、生産職だな」

「……知らなかった」

ギルド職員が連れて来たのは馴染みの無口系錬金術師アリーシャだった。

恐らく、知らなかったは俺と同じで仲間を探していたが、それに合う条件を持つのが俺だとは知らなかった、辺りだとは思う、自信は今回は無い。

さて、アリーシャの就く『錬金術師』アルケミストと言う職だが、分類としては生産職クリエイターであり、副回復系後衛職サブヒーラーに分類される。

薬品と薬草等を使った治療行為で仲間を回復すると言う戦闘中よりも、戦闘後の回復を重視する職な訳だ。

薬の分類も様々で、傷を癒す物、状態異常を癒す物は基本で、道具の効果を上昇させ、それを軸に戦う道具アイテムユーザー師と言う職が扱う爆発物等も薬に分類される。

道具師には劣るが、錬金術師にも道具効果上昇の技術がある。

某ゲームの錬金術師と似た様な道具を使う事を基本とした戦闘方法な訳だ。

ちなみにギルドカードには何故か、職業は表示されないのが不思議で仕方無いが、俺は一応剣闘士グラディエーターと言う職である。

後で職業表示出来る様にと要望を出しておこう。

「んまあ、良いさ情報のすり合わせをしとこう」

「わかった」

すんなりとアリーシャがギルドカードを渡してくる。

一応余り人に見せない方が良いのだが、渡されたのは信用されていると思おう、俺もアリーシャにギルドカードを渡す。

アリーシャ 種族：獣人／狐 ギルドランク：C

筋力：8／F 耐久：14／F＋ 敏捷：37／D

魔力：52／C－ 精神：44／D 信仰：39／D

器用：86／A 感知：62／C＋ 幸運：43／D＋

ランク：D

【錬金術】【薬効強化】【調合強化：5】

【治療：3】【罨：6】【真贋：4】【精密投擲：6】

まず目に付くのは先天技術の錬金術に薬効強化だ。

これは文字通りの効果だと思う、錬金術師の補正を加えれば道具師並みの効果があると見て良いだろう。

次に調合強化は調合と言う生産技術の上位版で、普通の調合品より高い効果を持つ様になる……だった筈、流石に俺が使わない生産技術の上位までは覚えていない。

治療は戦闘後の回復技術、精密投擲は俺も持っている投擲の上位だ。

真贋は鑑定の上位、知識とかなりの鑑定眼を持つ者だけが辿り着く境地。

町中で店を開くぐらいだから、此処まではまあ良い。

問題は罨だ。

罨はその名の通り、罨に関する技術なのだが、罨設置に罨発見に罨解除と言う三つの技術が上位に上がった所での複合技術である。

専門の斥候職でも中々お目にかからない技術だ。

能力値は肉体的な能力こそ低い物の、ずば抜けた器用に高い感知、種族的な物もあるだろうが非常に優秀な能力値である。

回復薬は俺にも効果がある為に回復職として、能力値と罨技術により斥候職としても仲間として申し分無い。

「成る程、アリーシャはかなり優秀だったんだな」

「ヒビキも強い」

こうして、俺とアリーシャはパーティーを組む事にした。

「運荷職がやはり欲しいな」

俺はともかく、アリーシャの筋力値は一般人であり、スタミナに関わる耐久も低い。

俺が荷物を持てば良いが、いざと言う時に動きが鈍るのも困る。

「募集する、注文」

頷いたアリーシャがパツと受付に向かう。

ランチメニューを指差していたので、昼食を頼めと言う事だろう。

了解の意味も兼ねて、ヒラリと手を振り、注文を告げる為店員を呼んだ。

八話 迷宮解説

パーティーを組んだ剣闘士ヒビキこと俺と、鍊金術師アリーシャの二人は、連携の確認を兼ねて日帰り迷宮探索に出た。

その上で解った事だが、アリーシャの鍊金術の火力は非常に高い。

彼女が基本で扱う魔力を込めた薬品は、火柱を起こす物と爆発を起こす物の二種類。

迷宮内に現れる2階位程度の魔物だと一撃で倒れる程だ。

但し欠点として、魔力を込めるのに少々の溜め時間が必要なのと、直線方向にしか攻撃出来ない、そして幾ら技術が高くても投擲の為に射程が短い、更には弾数に限りがある点だ。

つまり、アリーシャは中距離型弾数制限付きの、横スクロールアクションキャラだった訳だ。

「所でアリーシャ、迷宮には結構潜ってたのか？」

「あんまり」

「なら、休憩取って軽く解説しようか」

現在迷宮の3階層、時間は昼時休憩を取るには良い時間だ。

小部屋の掃討が済んだので、中に入り扉の鍵をかけ休憩を取る事にする。

「アリーシャも知っては居ると思うが、迷宮は迷宮ダンジョンマスター主が作り出す存在だ……目的は生命の魔素変換だ」

「迷宮王復活……」

「確かにそうとも言われてるな、だが復活と言うよりも王になるのが目的の様な気がする……まあ、どちらも迷宮主に聞かないと不明だが」

迷宮王とは、古い神話に残される総ての迷宮を統べる者と呼ばれる存在であり、伝承では一瞬にして都市を迷宮化したと言う。

「他にも理由はあるんだろうが……次に迷宮主の事は解るか？」

「黒目黒髪」

「それはそんなに多くないな、むしろ少ない」

現在判明している迷宮主で黒目黒髪と言うのは、深遠の淵を含めて七ヶ所、発見されている迷宮は攻略済みを含めると大小織り混ぜ千を越える。

つまり、ダンジョンマスター物で良くある学校全部だとか、一クラス丸々だとかならば既に最終局面では無いかと思われる。

「まあ、来歴が不明……あるいは異界からの召喚、はたまた突然変異での迷宮核化、野生の魔物の迷宮核の摂取辺りで迷宮主になると言われている」

これもまた推測でしか無い。

迷宮発生に関しては、解っている事の方が少ないと言う訳だ。

「魔素変換だが、これは元の存在と迷宮主により変化する、例えば此処なら海からは遠いのに『鯉節』が残ったり、栽培出来ない環境なのに『米』が残ったりする」

「砂漠で葉草」

アリーシャの言葉に頷く。

一般的に葉草と呼ばれる草は栽培する為に、水を大量に必要とする、それこそ大きな池が無いと育たない位には。

日本と違い、水はそれなりに良い値段がする、葉草の栽培をするなら水を買った方が儲かるレベルで。

葉草はともかく、環境的にあり得ない物が残る、と言う事だ。

「階層の区分けもあつたな、判るか？」

「教えて」

アリーシャの素直さに苦笑を浮かべ頷く。

ギルドでも教わる筈なんだが。

「迷宮は表層、上層、中層、下層、最下層、最深部の六つに分けられる、最深部だけは迷宮主、あるいは迷宮核が存在している場所、場合によっては、入った場所が最深部なん

て場合もあるな」

最深部と呼びつつ、迷宮核の位置を示す言葉となっている訳だ。

「さて、三十層までであると言うこの迷宮、今居るのは三階層だが、此処は何れに当てはまるか判るか？」

「……上層？」

少し悩んだ上で呟く様に言う。

「……ギルドで教わってる筈なんだがなあ、此処はまだ表層だ、正確には入ってから環境が変わるまで、あるいは環境変化が無い場合は総階層の十分の一が表層だ」

深遠の淵の場合、環境変化がある為、5階層までが表層と言う訳だ。

「此処の場合なら5階層までが表層、10階層までが上層、20階層までが中層、29階層までが下層、30階層が最下層だな」

大体がこの程度の分け方だ。

「ま、基本的にはこんなもんか、魔素変換自体なんかは原理不明だし、罫関連はアリーシャのが判ってるだろうし」

アリーシャが頷く。

「しかし、ギルドで教わってる筈で、アリーシャは記憶力悪く無さそうなんだがなあ」

「興味無かった」

その言葉に溜め息を一つ、いわゆる諦めと言う奴だった。

九話 執事とお嬢様

日帰り迷宮探索から帰った俺達は、ギルド併設の酒場で食事を取る事とした。今回の探索結果は大銅貨2枚と言う少ない額だが、酒場での食費に充てる。

酒場はそこそこの客入りだが、俺の知り合いは居なかった。

「やはり、運荷職は必要だな」

先に注文したエールを一息で半分程飲み干して言う。

アリーシャも必要性を感じて居るのか、特に何も言わずに頷く。

問題は俺はともかく、彼女と意志疎通を図れる事が前提となるが。

運荷職ポーターとはその名の通り、荷物を運ぶ冒険者のサポーターとも言われる職業の者達で

ある。

専門職で無くとも、パーティーの新人や、盾役あるいは鍵開け等を専門とする盗賊が行う事も多い。

この町には表向き居ないが、運荷職を下に見る様な冒険者も居る。

戦わず、分け前を掠める連中だと言う言い分だが、戦わずとも命の危険は変わらない。

戦いの代わりに荷物を運ぶ事に命を賭ける者達。

食料や魔素変換の素材、人それぞれではあるが料理等の技術を持ち、迷宮内でのキャンプを取り仕切る。

それは迷宮内でのもう一つの戦いである。

「お待たせ致しました」

等と考えていたら、注文していた食事がテーブルに来る。

運んで来たのは、見覚えの無い老紳士。

「……新人？」

アリーシャも見覚えが無いらしく、老紳士に尋ねる。

俺もアリーシャも、それなりにギルドの酒場は利用する。

ギルドの酒場は冒険者への食事と酒の提供をするだけあって、それなりに腕の立つ者で、信頼がある者でなければ雇われない。

つまり二、三日通えば全ての店員に会う事が出来るのだが。

「新人と言う訳ではありませんが、こちらで御世話になりましたミシエルと申します」

ミシエルと名乗る見事な一礼をする、燕尾服の老紳士には全く見覚えが無かった。

「ミシエル……冒険者？」

「ええ、一応ながら冒険者をさせて頂いています……あくまで、執事と言う一般職ではありませんが」

勤務時間も終わりとの事で食事を一緒に取る事になったが、どうやらこの老紳士は迷宮探索の仲間探しを兼ねて、酒場での日雇いをしていたらしい。

一般職とは冒険者以外の職、例えば料理人や鍛冶師、服職人等非戦闘職の職人系、商人や給侍、あるいはこの老紳士の就く執事と言った職業の事である。

勿論一般職だからと言って、戦えない事は無い。

場合によっては、下手な戦闘職より強い一般職の連中だつて居る。

「へえ、執事つて言えば貴族付きの事が多いんだが……珍しい」

「お恥ずかしながら、仕えていた家が没落致しまして、復興の為私が資金稼ぎに出ている有り様」

「よつぽど出来た主人なんだな、そこまで親身になれるつて事は」

「いいえ、逆で御座います、何も出来ない主人なので見捨てれ無いのですよ、ただ商才だけはあるので資金さえあれば復興も夢では無いのですが」

どうやらダメメンズな主人らしい。

「ええ、まさか婚約者だった王子に想い人が出来たからと言って、下らない策を弄して国家転覆を狙い、国外追放を受けるとは」

ダメンズならぬ、悪役令嬢あるいは悪徳貴族だったらしい。

「た、大変だな……その主人は何処に？」

「基本的に動かぬ様言い付けて、運命の歯車亭と言う宿に……ヒビキ様如何なさいました？」

まさかの同じ宿である、確かに料金の割にサービスが良い為、ベテランが揃って居るので安全ではあるが。

しかし主人に言い付けるとは、以外と偉そうな事をする執事である。

「ヒビキと同じ宿」

「左様で御座いましたか……宜しければヒビキ様、私と主人を仲間に加えては頂けませんか？」

「……何が出来るかってのと、その主人に会ってからだな」

アリーシャにも視線をやったが、頷くだけで何も言わなかった。

「ワタクシが当代フォン・マルセ当主、ニケリア・フォン・マルセですわ……と言う形で宜しかったかしら」

立派な金髪縦ロールのお嬢様が、運命の歯車亭の一階にある酒場で高らかに名乗りを上げて、周りの冒険者達に囁し立てられていた。

「ミシエルさん、もしかしくなくても彼女ですかね？」

「ええ、アレが私の主人ニケリア様で御座います」

時折毒を吐く燕尾服の老紳士、仮にも主人をアレ呼ばわりである。

「あら、ミシエル帰ったのね……そちらの方々は？」

「役立たずなニケリア様と私を仲間に加えて頂けるかも知れない方です」

役立たずを自分込みで言った様に見せて、主人にだけ付けたぞこの執事。

「面接から」

スツとアリーシャが言う、一語二語しか喋らない割にまともな事を言う少女である。

ただ、それで商売出来ているのかは知らないが。

「勿論ですわ、ワタクシは……」

「突つ立って面接するのもあれだ、席着いてからな」

お嬢様の言葉を遮り、空いている席を指差す。

周りの冒険者達も興味津々で俺達を見るが、仲間入りの挨拶と言うのは大切だと判っているで口出ししてこなかった。

「まあ、自己紹介から行くか……俺はヒビキ、見ての通り前衛をやってる」

剣を見せて名乗る。

「アリーシャ、錬金術師」

アリーシャは何時も通りに、非常に短い自己紹介である。

「あー……アリーシャは火力もある副回復職サブヒーラーだと思ってくれ」

一応ながら、追加で紹介しておく。

「ワタクシはニケリア・フォン・マルセ、皇国男爵家の当主ですわ」

「現状では元と付きませんが」

ニケリアの自己紹介に間髪入れず、ミシエルが言う。

「おほん、ワタクシこれでも貴族と魔術師の職を持つて、属性は光と水の二属性ですわ」
一般職である貴族はともかく、戦闘職である魔術師の二つの職持ちであり、二属性持ちと言うのはそれなりに優秀である。

属性とは、光闇火水風地命の七つの属性の内、それぞれが持つ物である。

八大神がそれぞれ司る属性からとられており、基本的には信仰する神により変動すると言われている。

ちなみに二属性持ちは三十人に一人程度の確率で存在するらしい。

「しかし、お嬢様の基本属性は無になりますので、余り相乗効果は無いのですが」

扱う属性魔術と術者の属性が合った時には効果があがったり、消費魔力が下がったりするのだが。

「改めまして私はミシエル・アイオリオ、一般職の執事ではありますが、ヒビキ様達がお

探しの運荷職の真似ならば出来ます」

「まあ、基本的には大量の荷物持つ事がメインだしな、他には何が？」

「料理に野営地点の設置、戦闘も嗜む程度には可能ですな」

万能型執事であった。

料理まで出来るならば、俺の料理技術の変更も視野に入れて、戦力の増加が可能だろうか。

アリーシャに目配せすれば、頷き返される。

「まあ、こちらとしてもそれだけ出来るなら歓迎だ、迷宮じゃ無くてまずは外で連携を確認しよう」

順当に仲間が増えると言うのは良い事だ。

だが代わりに、回復職が必要となつて来たな、流石にアリーシャの回復薬だけでは最深部を目指すには辛いだろう、ニケリアにミシエルは金目当てな訳だしな。

十話 面倒

冒険者に必要な物、それは生き延びる実力——生存力である。

それは、戦闘能力であったり、身を隠す能力であったりする。

パーティーに於いての生存力とは、連携と言つても過言では無い。

俺達——ミシエルとニケリアを加えた四人——は、町の周りの依頼をこなす事で連携を高めていたのだが。

「WAR—BEL—ST！」
水 刃 放つ

お嬢様——ニケリアの放つた魔術、『水刃』ワールストという言葉がゴブリンの群れを押し流して行く。

本来ならば、高圧の水流としてその名の通りに水で切り裂く術なのだが、単純な術には高過ぎる魔力、ニケリアの器用の能力値による魔力操作の低さ、そして高位の魔術を使えない魔力量——所謂レベルが低いせいでのMP不足——これらを併せた事で発生した事態だった。

これはもう、ニケリアの実力を上げて行くしか解決方法が無い。

彼女が使える魔術は後二種類、光源を発生させる『光源』リドロに、『魔力矢』ラストだが、光源は

消えない閃光弾を生み出し、魔力矢は単体生物にしか効果が無いバリスタだった。

使い勝手の悪い魔術師である、勿論ながら一切使い道が無い訳では無く、基本魔術の使えない俺よりマシだが。

ミシエルは全てをそつなくこなしていた。

彼の扱う得物は短剣、離れた相手には投擲し、近接では舞う様に両手に短剣を構え振るう。

更には闇の魔術により、その身を隠し影から暗殺し、大量の荷物を運ぶ。

万能執事に相応しい働きであつた。

「ミシエルさんすげえな」

「私の事は呼び捨ててください、あくまで冒険者では無く執事ですから」

「わかつた、でも凄いとしか言い様が無いな」

近接戦闘では能力差や職の違いから負ける気は無いが、良い勝負になるだろう事に称賛する。

「そうでしよう、ミシエルは素晴らしい執事よ」

何故かニケリアが縦ロールを揺らし胸を張る。

どうも彼女は素直過ぎて、周りの貴族の唆しに乗ってしまい、婚約者を奪った女をいじめたとの事で。

「全く、誉められる私と違いニケリア様は駄目ですな」

「わかっているわ、ワタクシがまだまだな事位は」

毒吐き執事に素直お嬢様、実に良いコンビである。

「そろそろ?」

アリーシヤが首をかしげ俺に訪ねる。

「そうだな、浅い階層なら問題は無いだろ」

連携を確かめた以上、目指すは迷宮である。

第一の目標は未到達階層、地上への転移装置のあると言われる15階層である。

ただ、辿り着くにはまだまだ足りない部分が多い訳だが。

「なんか、人多くないか?」

夕刻、冒険者ギルドに戻った俺達だったが、酒場にたむろする人数が多い気がして眩く。

人数が多い割に騒いでいる様子が無い。

「そうですね、妙に人数が多い、何かあったのでしょうか」

見渡すが、仲の良い勇者パーティーや、忍者を名乗る独りで迷宮に潜る変態、竜種ばかりを狙うおっさんなんかの姿は無い。

仕方無いと肩を竦めて、受付に向かう。

どうせ、依頼の達成も報告しなくちゃいけない。

「あらヒビキさん、どうしたのかしら?」

何時来ても受付に座っている年齢不詳、名前不明——聞いても笑顔で受け流される——の受付嬢の元へ行くと、テンプレートとなる言葉をかけられる。

「依頼の達成報告だ、それと何があつたんだ? 妙に人が多いが」

「確認致します、三日前から町出てたのでしたか……昨日から迷宮に今入れないんですよ、それと同時にギルドカードのバージョンアップがありますよ」

「へえ? ギルドカードのバージョンアップなんてしばらく振りだな、迷宮の方は?」

この世界のギルドの大元、八大神の中でも主神である刻印と無の神ルノンにより運営されている。

たまに冒険者からの要望や、神の思い付きでバージョンアップする事がある。

俺が初めて手にしたギルドカードは名前とギルドランクしか表示しない代物だった。

「迷宮は改装中らしいですね、迷宮戦が行われているとの噂もありますよ」

「それは厄介ですな、どちらにしても」

気付けば背後に居たミシエルの言葉に頷く。

「理由」

アリーシャとニケリアがキープした席に、報酬を受け取ってきた俺にかけられる短い言葉。

「カードの更新に迷宮改装だとよ……全く面倒なこつた」

面倒なのを隠さずに椅子に座り込む。

「何が面倒ですの？」

「第一にだが、冒険者の能力は隠された部分もあるが、神の力でギルドカードとリンクしてる、更新された場合に大幅に能力や技術ステータス スキルが変わる可能性がある……更新中は実は神の力の恩恵が無いんだよ」

この状態だと実は蘇生すら出来ないのも身動きが取れなくなる。

「迷宮の方は、地図がまず使えなくなる、更には植生が変わる可能性が高い……聞いた話ではあるが、ゴブリンばかり出ていた迷宮が改装後に、ドラゴンが鎮座する迷宮になった事もあるらしい」

聞いた話は極端な例ではあるが。

「……面倒」

溜め息を吐き、俺達も周りと同じ様に椅子に凭れ掛かったのだった。

十一話 ギルドカード

ギルドカードのバージョンアップ、その内容は職業の表記と、今まで隠されていたステータス能力値補正の開示、ギルド以外での控え技術サブスキルの一部表示、更には技術の詳細の表示機能と言う今までを考えると、大盤振る舞いなバージョンアップであった。

代わりに終わるまで4日と言う時間がかかった訳だが。

名前：ヒビキ 種族：人数／来訪者 職業：剣闘士

ギルドランク：B

能力

筋力：58 [10] / C 耐久：36 [5] / D | 敏捷：85 [12] / A |

魔力：0 [×0] / F | 精神：46 [5] / D 信仰：29 [10] / E +

器用：74 [12] / B 感覚：74 [8] / B 幸運：37 [10] / D |

技術

【格闘ゲーム機動】 【魔術無効】 【上級剣術：6】 【複数投擲：1】 【軽業：6】 【格闘：4】

【回避：2】

控え技術

【料理：4】【鑑定：6】【盾術：3】【上級重斧槍：4】

新しい表記「□」の内に書かれているのが能力補正らしい。

職業毎に補正が変わるらしく、ギルドもその情報収集で忙しくしている。

また一部の技術の名前が変更され、効果も変わったらしい。

技術が変更されているのは、正式にパーティーを組む事にしたので調整した結果だ。

神の力による影響もあり、セツトされている技術は能力値では無い部分に影響を及ぼす。

魔術技術を持たない者は魔術を扱うのに、持つ者の数倍の労力を払う、あるいは武器技術を持つ者は持たない者よりも数段強いと言った具合に。

入れ換えたのとは別に、全体的に熟練も上がり、上級技術に上がった物もある。

複数投擲は、投擲が進化した技術であり、一度に複数、現状では3つ同時に投擲出来る。

俺の持つ先天技術も名称が変更されていた。

早速追加された機能で、詳細を見てみる。

【格闘ゲーム機動】：異世界に於いて娯楽とされるゲームの動きを再現する。

全ての攻撃にダメージ補正を加え、最大7ゲージの必殺技ゲージを持つ。

代償として魔力が0となり、自身の魔力による魔術を扱えなくなる。

【魔術無効】：あらゆる魔術を無効化する。

一部の神の力以外、魔力関連の影響を受けない。

実は異世界に来てから既に五年程の時間が経っているが、魔術を扱えない理由が魔術無効では無く、格闘ゲーム機動にあるとは思わなかった。

魔術を扱えなくなると書いてあるが、格闘ゲームの炎を出したり雷を放つ様なキャラ、あるいはそもそも魔法使いキャラの場合はどうなるのだろうか。

俺がそんなタイプじゃないので不明だが。

そしてさりげなく名称が変化した魔術無効だが、一部の神の力以外は全て無効化するという、所謂壊れ性能である。

物理的な飛び道具以外効かない格ゲーキャラ、遠距離戦が無効なだけで、相当強キャラでは無かるうか。

そこまで格闘ゲームについて詳しい訳では無いが。

「ヒビキ、確認」

アリーシャがギルドカードを渡してくる。

信頼されていると言うより、口頭で説明するのが面倒なのではと疑ってしまう。だがまあ、許可が出ているならと確認する。

名前：アリーシャ 種族：獣人／狐 職業：錬金術師

ギルドランク：C

能力

筋力：8 [0] / F 耐久：16 [2] / F + 敏捷：32 [5] / E +

魔力：60 [13] / B | 精神：46 [2] / D 信仰：39 [0] / D

器用：82 [10] / A | 感覚：64 [8] / B 幸運：48 [5] / D +

技術

【錬金術】【薬効強化】【調合強化：5】【治療：4】【真贋：4】【精密投擲：6】【罨：6】

控え技術

【短剣：2】【回避：5】【直感：3】

基本的には変わっていない。

治療が前に見た時より1上がった程度だろうか。

能力値の上下は、修正が入った故だろう。

「ヒビキ様、本来ならばあまり見せるのは得策で無いとわかっておりますが、私たちのも

（確認を）」

「……良いのか？」

ギルドカードを差し出して来るミシエルを見る。

ミシエルが頷く。

「おそろくはリーダーとして、正しい判断をして頂けると」

期待をかけられている、と言う事か。

なら曲がりなりにもリーダーとして、その期待に応えなくては。

名前：ミシエル 種族：人間 職業：運荷／執事

ギルドランク：D

能力

筋力：3 1 [6] / E + 耐久：2 9 [8] / E + 敏捷：3 1 [7] / E +

魔力：2 1 [4] / E - 精神：3 9 [7] / D 信仰：1 5 [4] / F +

器用：4 4 [1 1] / D + 感覚：3 2 [5] / E + 幸運：1 6 [2] / F +

技術

【中級料理：6】 【野営：5】 【中級短剣：6】 【軽業：5】 【運荷：4】 【下級闇魔術：3】

【執事：M】

控え技術

【暗殺術：1】

まずはミシエルのギルドカード。

一般職業と、冒険者としての一多重職業《ダブルジョブ》持ち。

一般人からみたら遥かに高い能力値。

技術もかなり高い、そして噂でしか聞いた事の無かった、技術レベル『M』の文字。「執事って確か冒険者系じゃない一般系技術だが、マスターしてるのか」

1から7で表示される技術レベルの更の上、上級技術が存在しない程の技術レベル、—Master《マスター》の頭文字から取られた最高峰のレベルである。

「趣味と実益を兼ねている内になりましたな」
にこやかに微笑みを浮かべる。

ついでの控えにある暗殺術は、対応に対しても同じレベルが存在するから問題はな
い。

しかし、そら恐ろしいじいさんだ。

「さあ、ミシエルのは良いでしょう、ワタクシのも見なさい」

命令口調なニケリアのギルドカードを見る。

手の内を明かすのが危ないとは思わんのかね。

名前：ニケリア 種族：人間 職業：魔術師／貴族

ギルドランク：F

能力

筋力：9 [0] / F 耐久：9 [1] / F 敏捷：6 [0] / F

魔力：64 [12] / C + 精神：48 [10] / D + 信仰：42 [0] / D
 器用：9 [3] / F 感覚：15 [12] / F + 幸運：4 [0] / F -
 技術

【光魔術：2】 【水魔術：3】 【杖：2】 【機先商才】 【上級礼儀作法：5】 【無魔術：1】
 控え技術

ギルドランクが低いのはまあ良い。

能力値の半分以上が、一般人と大差が無いのはどう言う事だろうか。

技術も先天技術と礼儀作法があるが、それ以外は下級すら一付かない《……》レベルの技術。

——技術のランクはまず何も付かない所から始まる。

例えば、刀剣類の技術ならば『剣』と言う名前の技術を得る、次に細分化された『長剣』や『短剣』等となる。

更にレベルを上げる事で下級、中級、上級と上がっていくのだが。

能力値にしても一般成人男性が10程度の能力値である。

駆け出しの冒険者でも15程、ミシエルの能力値でベテランのバランス型冒険者と
 言った所か。

上限100まで——今回のアップデートで変わった可能性もあるが——で表される

この数値は、神の加護を込みで扱える能力。

まあ、筋力が60あったとしても常人の6倍の力では無く、ある程度から加速度的に上昇していくのだが。

「後衛だからまだ問題無いが……精神が高いのに魔術がああの性能……器用が必要かも知れんな」

まずは表層に行きつつニケリアの魔術の扱いを伸ばすべきだと思案する。

ただ一人で悩んだ所で、どうしようもないと、俺は仲間達にこれからの指針を提案する事にした。

十二話 砕ける剣

迷宮4階層の部屋の一つ、石畳の世界を仄かな灯りが照らす。

相対する魔物の姿、表層に於いて最強に近いと言われる、ゴ布林達の王——ゴ布林より一回り巨大な肉体、引き締まった筋肉、強大な力を持つ、ゴ布林ロード。

知能が低く数さえ居なければ敵では無いと、言われるゴ布林種の中で、ロードだけは別格であり、単独でも4階位、現状のゴ布林部隊を率いた状態で5階位……軍と呼ばれる程のゴ布林を率いていた場合6階位にもなるらしい。

鉄格子の扉を使い、俺と仲間を分断、扉の解錠をら狙えば、後ろから表層最強の名に違わない脅力を持って、ゴ布林ロードは俺に切りかかって来るだろう。

仲間達がゴ布林相手に奮戦するのが聞こえる。

本当なら、ニケリアの訓練予定だったのだが、大分予定とずれてしまった。手に握る剣の柄が滑る、相手は魔術を扱う相手では無く、純粋な力と技術で戦う戦士だ。

相手の得物は両手持ちの剣、小手を使って受け流すのはともかく、受け止めるのは辛い。

だが――

「やるしか無いって所かな」

気負い過ぎても結果は出ない、何時も通りに戦うしか無い。

「疾……ッ!」

先手は此方、一気に駆けて胴薙ぎの一閃。

ロードは両手剣を盾に防ぎ、そのまま力で押し返される。

「G h h a a a !」

雄叫びと共に空いた距離を物ともせず縦の一撃、後ろに跳び回避する。

地面が砕け、欠片がこちらにも飛び頬を傷付ける。

内心で舌打ちを一つ、右手だけで突きを放つが当たらない。

突きを避けたロードが内側に踏み込んでくる。

「そこは俺の――」

左拳を握る。

「――距離だッ!!」

右手を引き戻すと同時に相手に手を掴む。

――力業で上に投げ、引き戻した右手で落ちてきたロードの身体に、袈裟の一撃。

【格ゲー機動】、【格闘】と【上級剣術】の三つの技術による補正の入った一撃で、ロードが壁まで吹き飛ばす。

だがまだ健在、流石にこの程度じゃ倒れる気配は無い。

いわゆる投げ技一発で相手をK.O.出来る程この世界は甘く無い。起き上がりを狙って短剣を投げるが、弾かれ無傷。

睨み合う、お互いに油断は出来ない勝負。

だが、睨み合うだけでは後ろの仲間達が危ない。

なるべく速くケリを着けなくてはいけない。

——格闘ゲームに於いて、最も人間を越える動きとは何だろうか。

前ダツシュ、バックステップ？

それとも攻撃全般？

俺はこう考える——宙を蹴る二段ジャンプ、或いは空中ステップだと。

跳ぶのでは無く、ロード目掛けて前方に跳んだ頂点から、更に飛ぶ。

「一つ……ッ」

短剣を投げ牽制、更に前に飛び対地の前方落下突き。

突きはマトモに当たりバランスを崩すが、まだ浅い。

地面に降り立った所からショートアッパー、ロードの身体が浮く。

「Gaa」

追撃——袈裟、フック、突き。

壁に縫い留め、顔面目掛けた大降りのフック。

ロードの身体に蹴りを入れつつ、剣を抜いて距離を取る。

普通のこの階層の魔物ならば、これだけ与えれば死ぬのだが、流星は単独4階位。

傷がジワジワと治り立ち上がる。

「ちっ、これだけ強いんだよ」

後方から聞こえる爆発音が減ってきているのが気になるが、振り返る余裕は無い。

出来る事は変わり無い、駆けて上段からの唐竹割り。

肩口に刃が入り——

『Ghaaaaaa!』

ロードの咆哮、衝撃波が生まれ身体が壁まで吹き飛ばされる。

「くそっ……なん、だよ」

すぐに立ち上がりロードを見れば赤いオーラを纏う姿。

肩口には衝撃と汗のせいで放してしまった剣。

「ゲームとかなら、瀕死で能力アップとかありそうだけど……」

ロードが肩の剣を抜き投げ捨てるのを見て、宙を蹴る。

反応したロードの一撃は先よりも遙かに速く、左腕で防ぐが叩き落とされる。続けて放たれた突きは避け、転がりながら剣を回収。

即座に振り返れば、今まさに振り下ろされんとする両手剣。

立ち上がるには遅い、転がるにも同様、ならばと剣を盾にと掲げる。

響く甲高い金属音——飛び散る刃の破片、続いて感じるのは熱、左の肩から腹部まで、直線で感じる痛み。

——切られた。

行動は思考よりも速く、バランスを崩しながらも後ろに跳ぶ。

立ち上がろうとするが、力が上手く入らない——近寄ってくるゴブリンロード。

「^{アガートラーム}銀の腕」

無意識の眩きと共に俺の意識は暗転した。

十三話 銀の腕

「——成る程、久々だが中々に面倒な刻ときには場ではある」

響の肉体の損傷により、叩き起こされた私は『銀の腕』アガートラームが顕現した左手で、目の前に居るゴブリンロード等と呼ばれる小鬼の剣を止めて咄く。

私の記憶は未だ響には伝わらぬが、響の記憶は私に伝わっている。

コレの手相手はともかく、外の広間の小鬼共の数はあやつらには辛いだろう。

もう少し使い物になる魔術師ならば良かったのだが……まあ、私に彼の仲間を決める権利等あるまい、出てきたからには少しばかり手伝つてやるだけだ。

「G h o o o a a a a h !」

小鬼の王が吼える、撫でる様な威圧が肌に触れる——ふむ。

「まずは身体を治してやらねばな、代償はコレで良いか」

吹き飛ばない私に焦ったのか離れようとする小鬼、そうそう逃がす訳にはいくまい。

『癒せ——再生——生命回歸——命留の大釜——』

掴んだ小鬼の剣を代償として、銀の腕より放たれる力に変換する、剣は力となり銀光に消える——そして私は世界の理を無視した『魔法』を謳う。

『——冶金ダグデの大釜』

力は銀の光となり、響の肉体を癒す、防具まで直らないのは致し方あるまい。鍛冶の宝具、あるいは秘宝など、私には無いのだから。

「無手では効率が悪いか——」

圧倒的な力の差に、逃げ出そうとしている小鬼を一先ずは無視し、足元に転がる剣の残骸を拾い、力に変換——碎けていようと、彼の力となり続けた刃は、十二分に銀の腕を満たす。

『貫け——神速——腕を伸ばせ——光撃の槍——』

謳う詠唱と共に、銀の腕が纏う力が輝く斧槍の姿になっていく。

小鬼が隔てていた鉄格子を開け、脱兎の如く逃げ出している——が、逃がす気は無い。

『——穿槍ブリューナク』

左手の中に生まれた輝く斧槍を放つ。

一陣の光が疾る。

小鬼の王を貫き、小鬼の軍団の中心に突き刺さったその一撃は、肉、鎧、骨、武器、石、暈、迷宮——一切の区別無く破壊する。

「情弱、流石にこの程度か」

歩き広間へと出る。

彼の仲間が居る場所を見れば、三人とも健在。

但し魔術師の小娘は気を失っているらしく、横になっている。

恐らくは魔力の枯渇だろう、暫しの休息で治る程度か。

錬金術師も執事も満身創痍、片付けて戻るが得策か。

とは言え、先の一撃で小鬼の大半は死に、生き残りも戦意無く、逃げ出している。

ならば問題あるまい——魔素変換と言ったか、私とは理が違うが変換自体は問題無い

——無駄の多い術式故、少し弄り小鬼共を纏めて変換する。

「ヒビキじゃない……誰？」

錬金術師が警戒しながら問い掛けて来る。

「響に間借りしてる者だ、彼はまだ知らない——まだ知られてもいけないがね」

「理由がおりですか」

私の答えに執事が質問を重ねて来たので頷き、答えとする。

まだヒビキには知られる訳にはいくまい、今回は場も余りよろしく無いからな。

「——身体を此で響に返す故、脱出は二人……いや三人で頑張っていたけど、身体としては血を失い過ぎたからな——ああ、命には別状が無いから、慌てる必要は無い」

そこまで伝えると、私は目を閉じ再び意識を彼の身体の奥底へと沈めた。

銀の腕も再び元に戻るだろう——なるべくならば、目的の刻まで出番が無い方が良い

のだが
—

十四話 顛末、始まり

俺が意識を取り戻したのはロードとの戦いから半日後、運命の齒車亭での事だった。

——あの後何があったのかは分からないが、『死ぬ』事無く、俺はロードを仕止めたらしい。

しかも、技術スキルと言うこの世界の主神が作り出した法、神法あるいは魔法と呼ばれるシステムを越えて魔術——らしき物——を使った上に、非常に不可解な事を言っていたらしい。

しかし、その不可解な状況には実は何度か遭遇している。

俺は決して最強と呼べる程強くは無く、無敵と呼べる程タフでも無い。

能力値ステータスと言うシステム上、一般人の数倍、冒険者の中でもかなり上位に入る程の能力は持つのは事実。

それでも、死に瀕した事は幾らでもある。

その中でも、死に瀕した際、意識が途切れ気付けば辺りには敵対していた者の死体や、崩壊した荒野が広がる。

そして九割無意識の眩き、今回は覚えている。

「アガートラーム銀の腕……」

呾くその名は、元の世界——地球上の神話に出てくる義手だった筈だ。

左腕ガントレットの腕 甲の魔術具——二年程前にドワーフの鍛冶師により打ち直された魔導義肢を外す。

元来は一揃い、色違いの腕甲であり、両腕に身に付ける事で破壊の魔術を操る事が出来る物であった。

だが、かつての持ち主との戦いに於いて右の腕甲——緋色の右肩まであるもはや腕鎧——は、仲間の傭兵を多数と、俺の左肘から下を代償とし失なわれていた。

確かに名のある装備だろうが、今残る力は装着者の意思により、自由に動くだけの腕甲である。

決して銀の腕等と言う名前では無い、そもそも色が銀では無く黒である。

「まあ、考えてもわからんだろうなあ」

苦笑してベッドから起き上がったのだった。

「——アリーシャ様は薬品の補充をする為に数日の休みを、ニケリア様は魔力の使いすぎによりまだ意識を取り戻しておりません」

「——俺も得物を無くした以上、何とか融通しないと迷宮には挑めないな、ミシエルあん

たは？」

「手傷は追っておりますが、短剣ダガの補充程度で動けますな、ヒビキ様の得物が一番の問題でございますな」

運命の歯車亭の一階で前回の探索の換金額、そしてそれ以前の依頼から貯めていたパーティー資産、俺個人の資産を突き合わせてミシエルと相談する。

宿にしばらく滞在するだけの資産はあるが、新しい得物を手にするには、心許ない資産額。

「……如何致しますか？ 最後の手段としては、ニケリア様の商才を使い稼ぐという方法もございますが」

先天技術として商才の持ち主、それは実にチート染みた存在であり、儲かる物でありとあらゆる面から理解出来ると言う、完全なご都合主義にまみれた技術なのである。

故に商売をするならば、商業ギルドへの登録を必須とし、売り上げの九割——恐ろしい事に純益では無い——を上納、脱退する場合でも大金貨5枚を支払わなくてはならないと言う条件を必要とするらしい。

それでも、支払いきるのが商才持ちだと言う事、これも世界経済の保護の為だと言う話だ。

だが、決して短く無い時間がかかるのが実状である、つまり正に最終手段。

「……仕方無い、少し町を離れて古巣に置いてきた得物を取ってくる」

「古巣と言いますと？」

余り行きたく無いんだが、仕方無いだろう。

「アモン傭兵団だ」

十五話 貿易都市

『街』から馬車に乗ること三日、街と各国への貿易を一手に引き受ける貿易都市アルテナに到着した。

実質アルテナも迷宮主の支配下ではあるのだが、商人は気にせず、お偉方もまた気にしていない。

要はワンクッション置いている、と言う事が大切な訳だ。

さて、俺が貿易都市アルテナに来た理由だが、俺が以前所属していた傭兵団の拠点の一つであり、装備品の一部を預けていた拠点でもある。

対人なら大概の相手は無手でも何とか出来るが、魔物相手の場合だと無手ではどうしようも無い相手が居る。

例えば竜種、実物を見た事は無いが、話に聞くだけでも、最低体長5メートルを越え竜種特有の分厚い鱗に守られ、牙や爪以外に炎や氷、あるいは酸等のブレス、更には魔術を攻撃手段として持つ。

それ以外にも、スライム等は素手では触れられる相手では無いし、人型でもオーガ等になれば与えるダメージを再生能力が上回るだろう。

迷宮で戦った相手であれば、ゴ布林ロードはもとより、ミノタウロスにも手が出なさそうだ。

町中で馬車を降りた俺は辺りを見回す。

街とは違う活気に満ちた町並み。

町中で働く魔物の姿も見えないが、冒険者らしき姿や人間以外の姿は幾らか見える。

街では『まだ使えない』冒険者を受け入れるのが、此処なので大半は見習いや所謂初級あるいは中級と呼ばれる冒険者だ。

ふと、誰かに見られている気配を感じ、辺りを再び見渡す。

しかし見えるのは、日常を過ごす街の住民や、何かの依頼中だと思われる荷物を担いだ冒険者らしき姿ばかり。

こちらを注目する人物は居ない。

「……気のせい、か？」

短く呟くと目的地へ向け足を進めた。

俺が所属していた——正確にはまだ所属しているのだが——傭兵団の名は『アモン傭兵団』、その名の通りアモンと言う名の男が団長を勤める傭兵団であり、団員数もさる事ながら一部の団員の強さから最強の傭兵団と呼ばれる事もある。

アモン自体は昼行灯を気取り滅多に実力を見せないが、神により公爵、正確には神公爵の爵位を受けている。

神の与える爵位は人が与える爵位よりも上位となる、が与えられる基準は今一つ判つていない。

昼過ぎた頃、アモン傭兵団の拠点の一つ——ソロモンズギルドと呼ばれる傭兵ギルドへと——辿り着いたのだった。

傭兵ギルドとは、基本こそ冒険者ギルドと同じ様な存在であるが、利用者が傭兵である事と、素材の買い取り等はやっていない事から、冒険者ギルドよりも多少荒っぽい。

——ソロモンズギルドに関してはまた後日。

十六話 アモン傭兵団

傭兵ギルドは所属傭兵団に対し、事務所と武器庫、それに団員の寝泊まりする部屋を貸与している。

そしてこの町の傭兵ギルドに所属する団は、何の因果かソロモン七十二柱の名を持つ傭兵団ばかりが所属している。

故に誰が呼んだか、ソロモンズギルドと呼ばれている。

「よお、久々じゃないの?」

傭兵ギルドのアモン傭兵団が借り入れている一室、安っぽい椅子に座ったまま寝ていた男が、ノックと共に入ってきた俺に対して日除けに使っていた街の新聞をあげながら言う。

男の名は仮名ではあるがアモン、主神から神公爵の爵位——王候貴族の与える爵位とは別に神の与えた爵位には頭に神と付く——を与えられた男であり、傭兵団の団長である。

見た目はあくまでもうらぶれたおっさんでしか無いが、実力は神爵を与えられる以

上、確かな男である。

「団長、相変わらずのご様子で」

「珍しいじゃないの、戦争しじつの連絡もして無いのにヒビキおまえが来るなんて」

テーブルを新聞——先月の『街』の新聞——を置いて団長が俺を見る。

「大分金かけた得物を迷宮内のトラブルで失いましたね」

「迷宮だと長物使い難そうだって言つてたのは、お前さんだろうに」

肩を竦め苦笑を浮かべる俺に、苦笑を返しながらし団長は言う。

「意外に得物振れる場所が広くて、それに長物じゃないもう一つも整備してくれてるんでしよう?」

「当たり前だな、冒険者もだろうが、傭兵も得物は命にかかわるからなたやつてるのはちびっこだけだな」

「アイツがやつてるんですか、また変なの見付けて小銭稼ぎですかね?」

ちびっこ、あるいはアイツと言うのはアモン傭兵団の一員であり、神聖騎士パラディンと呼ばれる盾職と回復職を合わせた職をこなす少女の事だ。

小銭稼ぎと言うのは、アモン傭兵団では持ち回りで武具の整備をするのが伝統となっているのだが、幾ばくかの金銭等で交代する事を暗黙の了解として許可しているからだ。

つまり、武器の整備を優先して行っていると言う事は、小銭稼ぎしていると言う事だ。恐らくは彼女の趣味に使うのだろう。

団長が部屋の隅に置かれたラックから、ケトルとカップを出しながら言う。

「じゃないの？ まあちびっこ帰ってくるまで黒茶でも飲んで待つてると良いよ、今日も鍵持つてるのちびっこだからな、特例はあんまり使いたくないのよね」

「了解しました……しかし、団長直々とは恐れ入る」

「気にしない癖に何言つてんの、それにただの作り置きだからね」

カップに茶色い液体が注がれる。

黒茶……正確には黒色^{こくしよくまめぢや}豆茶と言うのだが、その正体は珈琲である。

各地迷宮原産の採取品、黒色豆を煎つた後の皮を粉末にすると、まさにインスタントコーヒーの様に飲めるのだ。

迷宮原産で無い場合、普通の珈琲豆もあるのだが、こちらは貴族が購入する様な高級品の為に飲んだ事は無い。

余談ではあるが、豆自体は煎るとピーナツの様な味がして旨い、冒険者の酒のツマミとして良く出てくる。

生で食べると一粒で腹を下す様な毒を持っているが。

「まあ、もうすぐ帰つてくると——」

カップを受け取り座らせて貰った所で室内にノックが響く。

「取り込み中すみません」

入ってきたのは知り合いで同期の中隊長と恐らくは彼直属の部下二名だった。

「仕事ですか？」

「大した事じゃないんだけど……そろそろ演習に向かって副長が帰還する様です」

ほぼ引退に近い俺に聞かせて良いのだろうか。

「ん、了解今日明日って訳じゃ無いんでしょう？」

団長は気にせず言葉を紡ぐ。

「それが……今日中には戻って来そうなんですよね」

俺をちらと不憫そうな目で見て言う。

成る程、彼は俺に対する親切心も込みで報告に来たらしい。

「……マジか」

「長居しない方が良さそうだねえ」

団長が苦笑しながら言う。

アモン傭兵団の副長は俺のやる事為す事が副長は気に食わないらしく、何かと突っ掛かって来る人物である。

まあ、何かと自由にやらせて貰っている以上、副長の意見はある程度までは最もものだが、進んで顔を会わせたい相手では無い。

「まあ、受け取ったらすぐ帰りますよ」

苦笑しながら言うのが精一杯であった。

「話戻すけど、ちびっこが個人的に冒険者やってるんだよね、最近うちも仕事少ないから
さ」

中隊長が退出した後には話を切り出される。

此処のところ大きい争いの気配も無い以上、傭兵は暇を持って余していると言う事が、副長の指揮で演習する位だし。

「成る程、固定の護衛やら、用心棒の仕事なんかはアイツじゃ厳しいですからね」

傭兵と言うのは争いが無ければ基本的には無駄飯食らいだ。

平和ならば真つ先に雇い主から切られる訳だが、平時何をするかと言えば、冒険者の真似事をしたり、町中やパーティーでの護衛、いわゆるSPをやったり、商店や、賭場の用心棒をしたりしている。

護衛にしろ、用心棒にしろ外見は少女、あるいは幼女なので些かしまりが無い。

団長が頷き、カップを傾ける。

それを見て俺もカップに口を付ける。

「——甘っ!？」

たんなる牛乳、あるいは山羊乳入りの黒色豆茶かと思つたのだが、まるで日本に有つた黄色と茶色のパッケージの練乳入り珈琲の様な甘さであつた。

甘いのは嫌いでは無いし団長が甘党だと言う事は知つていたのだが、予想よりも遙かに甘く吹き出しそうになつた。

「おお、まつさんだかなんだかつて言うのをお前みたいに、外から来た奴に教えて貰つてな」

どうやら当たりのようだが、缶入りで無い以上普通にフルネームで呼ぶべきなのが、まあ良いか……俺はペットボトルで時折飲んでいたが、缶は以外と見なかつたな。

比較的どうでも良い話題である。

四半刻が過ぎた頃にコボルト——二足歩行する犬の姿、今回はブルドッグの顔をした亜人種、正確に言うのなら、亜人種ですらない魔物の一種——の団員が、目的の人物が帰つて来たと伝えに来た。

「んじゃ、受け取つたらすぐに帰りますよ」

旧交を深めたいところだが、副長が来るならと苦笑混じりに、書類仕事をしている団長に声をかけて立ち上がる。

「ああ、ついでだちびつここにこいつ渡してくれ」

書いていた書類の一枚を封筒に入れ俺に渡してくる。

しっかりと封筒に入れるって事は何らかの指令って事か。

大した事の無い伝言なら、メモ帳の走り書きでそのまま渡すような人だからな。

「了解しました、またキナ臭くなったら戻る事にしますよ」

封筒を受け取り、ひらひらと手を振る団長に手を振り返し廊下へと出る。

「まあ、また会うのも近いかも知れないけどね」

背中越しに聞こえた言葉は何か有るのだろうと予感させられる。

その時はまた、団長の力になるとしよう。

通りがかったアモン傭兵団の団員——団員は炎を模した腕輪をしてるので見分けやすい——に、目的の人物が何処に居るか訪ねた所、地下の武器庫にもう行ったと言うのでさっさと向かう。

傭兵と言う職業は、冒険者に比べ些か一般の者達に対して印象が悪い。

魔物以外——人間どうし、あるいは亜人種との……あるいは神の代理の——の争い、戦争に於いて出て来る戦鬪集団。

敵対勢力の殺害は勿論、略奪や強姦、拷問まで請け負う者達……それが一般的な傭兵

への見解。

故にギルド所属の良識ある——戦争となれば、上からの命令に従い行うが——傭兵達は普段最低限の武装しか持ち歩かない。

それが傭兵ギルドに所属傭兵団の武器庫が存在する理由である。

まあアモン傭兵団に関しては非常に優良傭兵団な訳だが。

「邪魔するぜ」

開いているアモン傭兵団の武器庫の扉を開きながら声をかける。

昔の癖で中に居る人物を見渡す。

全員で人影が八つ、無関心なのが二人、訝しげな目でこちら見てくるのが四人、こいつらは見覚えが無いので新人だろう。

この対応じゃすぐに死ぬな等と考えながら、飛んできた投げ短剣を左手で弾く。

投げ短剣を投げた奴も新人だろうが中々良い腕だ、聞き覚えの無い声で入ってきた人物に対して即座の対応、傭兵としては長生き出来る。

武器は傭兵の様々な意味での命綱——傭兵団で使用する器具には傭兵団の言葉——であり、武器庫に知らない者が入って来たならば正しい対応だ。

最後の一人は目的の人物なあか、弾いた隙に一気に懐に潜り込んで手に持った武器を振るってくる。

振るわれたのは小剣、逆の手には短剣を持つているのが見える。

小剣の刃が当たたる寸前に流れに沿って右の踵を中心に回転、即座に突き出された短剣の刃を左手で掴む。

「腕は落ちてないみたいだなコココ」

「あれ……？ ヒビキ？」

「おう、まだ退団はしてないんだから先輩ってつけるよ」

冗談混じりに言う俺の胸元程度までしか身長が無い少女、あるいは幼女と呼べる姿、俺に対して容赦無く武器を振るった相手。

アモン傭兵団の中堅、神聖騎士草原小人ハーフレリッゲのコココである。

草原小人とは、いわゆる指輪を火山に捨てに行く物語の主人公と非常に近い種族である。

主に草原の多い地域で旅と音楽、そして楽しい事を好む、力は弱いが器用でちよこまかと動き、運も良い本来ならば盗賊系シーフや詩人系ポエトの職業に向いた種族である。

本来ならば種族的には魔術の素養を持たないのだが、何の因果か八大神の一柱である風の神の加護を受け、自由気儘に生きていたら神聖騎士となり、アモン傭兵団に入団したと言う良くわからない経歴の持ち主である。

「先輩、その人は誰っスカ？」

唯一俺に対して行動出来た人物がコココに対して疑問を投げ掛ける。

声色からすると少女、成人はして居ないだろう。

影になる位置に居るので姿はしつかりとは見えない、だがその手に二本目の短剣が握られているのだけ見える。

「あーそつか、知らないんだっけ」

「俺も見覚え無いからな」

コココの言葉に俺も相槌を打つ。

「この人はヒビキ、戦時中隊長で『戦鬼』って言ったら伝わるかな」

コココの言う戦鬼と言うのは、何時からか俺に付けられた二つ名である。

冒険者の間では呼ばれないが、傭兵間ではそれなりに有名な二つ名である。

「せせせせ、戦鬼さんっスカ!」

影から出てきた少女は人間じゃなくコボルト——彼女は柴犬——だった。

凄いい動揺しているが大丈夫か、しかし知らぬ間に亜人種の団員が相当に増えたらしい。

コボルトだけならず、ゴブリンやオーガの団員も見掛けていた、知性を持ち魔物社会を抜け出した彼らが就ける職業と言うのは少ない。

それこそ傭兵を筆頭とした半分裏社会に存在する職業、更には主都等には就ける職業

は無い。

街に近いから出来る部分もあると言う事だな。

「どうしたんだ、アイツ」

ガタガタ震えて手に持っていた短剣を足元に落としたのを見てコココに尋ねる。

「多分だけどね、ヒビキの——」

「ふあ、ふあんです！ 良かったら握手して欲しいっすー！」

コココの言葉を遮って目の前に飛び出してくる、コボルト少女。

千切れないか心配な位に凄い勢いで尻尾が振られている。

「ああ、構わんよ」

多少気圧されながらも俺は、コボルト少女の後輩傭兵と握手をかわしたのであった。

十七話 武器庫

「それでヒビキは何しに來たの？」

「ああ、それなんだが預けてあつた俺の得物を取りにな」

俺とコココは話しながら武器庫の奥へと進む。

俺の様に現状不在だつたり、使い手の居なくなつた武具は奥にしまい込むようにしたんだとか。

納得ではあるが、今まで誰もやらなかつた作業である。

「そう言えば、新しいお気に入りでも見つけたのか？ 小銭稼ぎやら、冒険者やらやつてるみたいだが」

「あーそれ？ もう手に入れたんだ、コレ！」

笑顔で腰に提げていたを戦槌メイイス見せて来る……戦槌？

外見は持ち手と言うか、50センチ程の棒が底から生えた白磁製に見えるティーポットであつた。

国に仕えない数少ない神聖騎士、さらにはもつと少ない騎士職の草原小人、彼女の趣味は『変わった武器を集める』事であつた。

いわゆるゲームに於けるネタ武器使いと言う奴だ。

ずっと凍ったままの俺の身の丈程あるマグロとか、投げるとロケットの様に飛び回る薩摩芋とか、自動で足の小指に当たりに行く防御無視効果の付いた辞書サイズの本だとか、使えない訳じゃ無いが外見は非常にネタに満ち溢れた武器を、彼女はこよなく愛しているのだ。

「……ソイツはどう言っただ物なんだ？」

「ロイヤルメイスイツって言っただけで聖属性に火属性、水属性の三種類の属性を保有した上に不壊の魔術が掛けられた逸品です」

属性武器、それは通常の武器威力に加え、属性ダメージを追加で与える非常に優秀な武器だ。

三属性付きで更には不壊魔術付きと言うならば、まともな武器ならずとも国宝級の逸品だと言える。

「相当値が張りそうだな……」

「問題があつてねー、使用条件に女性で騎士職、何れかの上級神術つてのが最低条件で、完璧に扱うなら侍女あるいは執事の技術も必要なんだよ」

どんな奴が作り出したのか非常に気になる条件である。

侍女あるいは執事の女性神聖騎士、いわゆる姫騎士と言う奴なら使えない事も無いか

も知れない。

執事でもありと言う事は男装の麗人もありと言う事だろうか。

「執事か侍女持つてないと、振った時に中身が溢れるんだよねえ」

「外見からは理解できるが、武器としては理解出来ない」

「ロイヤルミルクテイーが常に満タンで入ってるんだ」

「……成る程、わからん」

俺は早々に理解する事を諦めた。

「んじゃあヒビキが持つていくのはコレと、あの短剣で良いんだよね？」

武器棚に立て掛けてある鈍色の斧ハルバード槍をコココがぺちぺちと叩く。

長さは2.4メートル、重量は不明。

魔力自体をを阻害する特性を持つ真鋼を素材とした逸品だ。

切れ味も鋭く、耐久性もかなり高い、更には鋼と言いつつも十全に威力はある癖に、非常に軽い。

ただし、俺の持つ『格闘ゲーム機動』程では無いにしろ、魔力自体を阻害する為に魔術を操るこの世界の住人達には、使い勝手があまり良くない。

稀に剣だけで身を立てようとする者が剣を作るのに使う、その程度の素材だ。

だが、元より魔術の効果が無い俺からすれば真鋼製の装備は一切問題無く使える。

問題は整備が非常に面倒なものと、取り扱う鍛冶師がほぼ居ないと言う事だ。

もしかしたら来た当初に諦めた刀も真鋼なら、と思い付く。

まあ、若気の至りと言うか、この世界には刀が存在する。

長剣にある程度慣れた後、一時期刀を扱っていた時期があるのだが、太刀筋を誤り曲げたり、骨を叩き切つてしまい欠けさせたり、重い攻撃を受け止め折つたりと散々だったので、使うのを諦めた。

剣の扱いを身に付けた今、耐久性の非常に高いこの素材を使つてなら、と考えたが、また曲げたり折つたりした時にショックを受けそうなので止める事にする。

「ヒビキ、後これでしょ?」

コココが持つて来てくれたのは黒色——真鋼以上に魔力を阻害する無魔鋼製である——のアタツシケース。

「ああ、確認用を開けるぞ」

開くと俺の目にも判る程、濃密な魔力が溢れ出す。

中に入っているのは、符術により封じられている筈の拳銃リボルバー。

元の持ち主は狂わされた殺人鬼、傭兵時代の成果の一つ。

数々の魔改造が施され、銃剣バイヨネット付きの拳銃である。

更には魔力により自動で銃弾を装填する機能を持つが、拳銃自体が尋常ならざる魔力

を持ち、持ち手を侵食する呪いとなっている。

濃密過ぎる魔力は本人だけでなく、周囲にも影響を及ぼす。故に封じられている訳だ。

「さて……今なら言う事聞いてくれるかなつと！」

左手の小手にも期待——『銀の腕』^{アガトラム}なんて名乗り、俺を救うのなら——して、左手で銃を取る。

魔力が俺の左腕を這い上がり、包み込まれる。

俺に効果が無いのはあくまで、『魔術』、形式化した魔術で無く、魔力自体は俺には無力化されない。

左腕に沸き上がるのは破壊、殺戮、失望、絶望。

——だが、それだけ。

その程度は元から持っている、壊れ乞われたおREN——

「……キ……ヒビ……ヒビキー！」

意識が飛んでいたらしい、呼び掛けていたコココを見る。

「ああ、すまん……もう問題無い」

「でもその左腕……」

コココの言葉に、自分の左腕を見る。

「中二か」

左腕が呪いの影響か、黒く染まっている上に、赤く蔦が這い上がるような紋様が描かれていた。

だが、いたって問題は無く、これ以上侵食する事も無さそうだ。

「大丈夫なら、良いんだけど……」

心配そうに俺を見るコココの頭をぼんぼんと撫で、問題無いと伝える。

一度アタツシケースに戻すが、左腕は戻らない事に軽いため息を吐く。

背に斧槍を背負い、左手にアタツシケースを持つ。

「ああ、そうだ……出る前にアモン団長からお前にだと」

懐に入れたままだった封筒をコココに渡す。

「わかった……なんだろう？」

受け取りいきなり中を確認しだす。

その表情は更に困惑を深める。

「団長は何だつて？」

「渡して見送つたら、マアナ……さっきの子連れて来いって」

「良くわからんな、まあ良い副長帰って来るらしいからさつさと……」

武器庫の扉を開ける。

「私が帰って来るから、何ですか？ ヒビキさん？」
目の前にその副長が立っていたのだった。

十八話 一区切り

「アナタは何時もそうやって私から逃げますね？ 何か疚しい事でもあるんでしょうか？」

アモン傭兵団の副長、冷血の二つ名を持つ銀髪のエルフの女性が、俺の逃げ道を塞いでいた。

後ろは武器庫、前には副長。

どう足掻いても逃げられそうには無さそうだ。

「はあ……別に疚しい事なんざねえよ、あんたのその性格が苦手なんだよ」

「私が苦手なら近付かなければよろしいでしょう？」

「用がなけりや来ないがな、それにあんたが勝手に近寄って来るんだろ」

溜め息の一つも吐きたくなる、これが嫌で来たくなかったのだ。

別に彼女が悪い人物だと言う訳では無い、だが徹底的にお互いにウマが合わないだけで。

「私は別に近寄っていません、何の言い掛かりですか」

「まあまあクロセル副長、今回はヒビキさんも預けてた武器取りに来ただけですから」

コココが間に入る。

そう、彼女の名は『クロセル』、詳しくは知らないがソロモン七十二柱の名を連ねる悪魔の名を持つ。

何も団長だけが、ソロモン七十二柱の名を持つ訳では無いと言う事だ。

「まあ俺はもう用が無いから帰らせて貰うぜ」

「待ちなさいヒビキ、逃げるのですか」

「副長！」

「逃げさせて貰いますよ、何するにしても命あつての物種だからな」

「このっ………！」

副長の言葉で辺りに霜が降り始める、彼女の先天技術である『冷却』の発露だ。

辺りの気温が一気に下がり、コココは既に震えている。

俺は何時も通りの服装……つまり気温調整の外套を纏っているので被害は無いが。

「副長、そこまでにしといてくれる？」

地下に何時の間に降りて来たのか、アモン団長の声が投げ掛けられる。

「団長、しかし——」

「しかし何だい？ 君と相性が悪いってだけで、仲間を多数巻き込んで味方を殺すのが、

君のやり方なのかな？」

「……………」

団長の言葉に何故か俺が睨まれる、俺は基本的には無駄な争いはしたく無いんだが。「何時もながらすまんね、後は任せて気を付けて帰ってくれ」

ぽんと俺の肩を叩き団長が言う。

「ええ、まあ……団長も頑張つて下さい、色々」と

苦笑しながら俺も言い、言葉通り後を任せる事にした。

下手に残れば争う……と言うか、突っかかって来るのは目に見えてるからな。

「さて、と……土産を買う余裕がある訳じゃ無し、さつきと帰りますかね」

斧槍を右肩に担ぎ、左手にアタツシユケースを持つ。

古巣ではあるが、今の俺は傭兵じゃない。

あくまで冒険者だと心に刻んで『街』へと帰る。

そう、俺の目的は結局の所迷宮で味噌か醤油を手に入れて美味しい食事を楽しむ事なんだから。

日本に帰れるならば帰りたいが、戻ったら戻ったで色々と面倒そうだよなあ。

時間の流れも判らんし。

十九話 主神とフラグ

武器を回収してから早一週間、新しい得物を扱つての連携にも慣れ始めたが戻つた当初にはニケリアに「パーティーメンバーに伝えず居なくなるなんて！」と文句を言われたり、命神のタマヨリには「私にひとことあつても良いじゃないですか！」と謎のお叱りを受けたりした。

タマヨリはともかく、ニケリアはミシエルに伝言してあるのだから、話を聞いていなかったのだろうと予測出来る。

アリーシャは短く「お帰り」と伝えて来たので。

さて、閑話休題。

今俺が居るのは少なくとも街の中では無いのは断言出来る。

断言出来るのは普段通りに運命の歯車亭のベッドで寝た筈なのに、卒業してから凡そ12年程経つ、我が母校の教室の席に座って居るからである。

時計の時刻は9時丁度を指すが、外の景色は日が高く、昼過ぎに見えるので信頼性は一切無い。

教室に居るのは俺だけならず、アリーシャ、ニケリアにミシエルと言った俺のパーティメンバーに加え、命神の勇者ユーマに血統勇者のモモ、街のマスコットコボルト冒険者のヨシユと此処までは何と無く判らなくもない。

何故かつい先日会ったばかりのアモン傭兵団のコココに、コボルト傭兵のマアナ、それに見覚えの無いオッサンと若い学生っぽい男までもがこの場に居る。

見覚えの無い景色にキョロキョロと辺りを見回す他の連中を放置してユーマが俺の席に来る。

「ヒビキさん、此処何処か判ります?」

「何処かは解らんが、再現されてるのは俺の通ってた高校かな……勿論俺にこんな事は出来んが」

肩を竦めて返事する。

「んー……あれですかね、小説だと高確率でエタるって言う学園編突入つすかね」

「いやいや、何言ってるんだよ、絶対エタるって決まってる訳じゃ無いだろ」

等と他の連中には伝わらない話を苦笑混じりに交わす。

「まあ、何にしても多分——」

そこまでユーマが言った所で教室の扉が開き、見覚えのある男が入ってきた。

「よーし、お前ら席に着けー、話始めるぞー」

犯人と言うか、元凶と言うか、この状況を作り上げた張本人のこの世界の主神、日本人には見えない白眼白髪のアツクヨミを名乗る存在だった。

「あー……まず、この場所だが、冒険者ヒビキの記憶にあつた場所を借りた、夢の世界だ」
成る程、夢の中ならば色々調整出来ると本人が言っていたからな。

「んで、今回こんな事をしてるのは大幅にギルドカードの表示を変更すると、迷宮の方で問題が起こるからだな」

「ちよつと待つてくれ、俺はしつかりやってたと思うんだが」

学生っぽい男が発言する、つまり発言から察するにあれが迷宮主なのか？

「お前さんは問題無いが、他の所でいざこざがあつたらしくてな、余波で問題起こるのが楽に予想出来る、起きたら多分迷宮一時閉鎖した方が得だぞ」

「……成る程わかつた、すぐ対応しよう」

思い当たる事でもあつたのか、頷く迷宮主。

何人か流石に気付いて、迷宮主の方を見ている。

「ギルドカードの方だが、これまでは全部ひつくるめて技術って呼び方してたスキル関連だが、一特性《ユニークスキル》と一受動技術《パッシブスキル》、それにこれから追加される一能動技術《アクティブスキル》の三種類になる……今まで直感的に使つてた技を一世界法則《システム》的に許可した感じだな、使い勝手が変わるとは思うが、納

得してくれ」

まるでゲームの様な感じだな、早期アクセスのバージョンアップじゃないんだが。

「ちなみにはあるが、この対応は街の……名前が無いからあれだが、迷宮街の連中に先行して行っておく、早めに慣れてくれ、他の教室でも同じ様に説明してるからな」

迷宮主がこの場に居るってのはどうも嫌な予感しかしないんだが。

この前のアモン団長の言葉もある事だしな。

「それじゃ、目覚めたらカードはギルド行つて書き換えてくれ——」

目を覚ます——が、視界に映るのは運命の歯車亭の風景では無く、未だ教室の風景。先程と違う点は、俺とツクヨミの二人だけだと言う点である。

「まだ夢の中って訳か」

「すまんね、今度は個別面談だ」

ツクヨミ——床まで届く長髪に白いローブ、神を名乗る男はにへらと、柔らかい笑みを浮かべる。

「んで、個別面談って何やらされるんだ？」

机を指先で叩きながら訊ねる。

「うん、今回の事でちよつとお願いしときたい事があるんだ」

「お願いの内容を聞かない事には、対処のしようも無いんだが？」

「今回の一黒幕《・・》の事かな、お礼は武器の使い勝手の向上辺りで」

ツクヨミが苦笑を浮かべながら言う。

礼はともかくそれだけではわからない。

「意味は無さそうだけど、明言は避けておく、もうちよつと先になるとは思うんだけど、ある国が街に対して戦争を仕掛けて来そうなんだ」

戦争か、しかし今ツクヨミは一国《・》と言った。

この世界には国と呼ばれる共同体は大きく分けて五つしか無い。

ツクヨミを除いた八大神達が基となり作り上げた、人々を守る存在。

即ち、光神の聖皇国、闇神の魔王国、炎神と地神の帝国、水神と風神の共和国、命神の公国。

この内、命神の公国と、水神風神の共和国は除外される、現在風神と命神は街を拠点にしている。

更に、共和国は国として戦力を保有して居ない、あるのは、冒険者と傭兵が滞在する地域がある程度なのだ。

二国より確信は無いが、闇神の魔王国もツクヨミから聞く人となり——神ではあるが——からすれば一単独では《・・・》あり得ない。

あり得るのは二国のどちらか。

どちらでもあり得るのが一番の問題である。

しかし迷宮を擁する——あるいは逆だが——とは言え、一つの街が国を相手にする、出来るのか。

「で、戦争の中で傭兵復帰して戦えば良いのか？」

「いや、違うんだ、確かにそれも良い手段の一つでは有るんだけど、最善の手じゃない」「なら、何するんだ？」

「傭兵団を囷に、黒幕に単独で奇襲を仕掛け倒して欲しい」

「——それは、神殺しになれって事か？」

彼の言葉通りならば、黒幕——国を運営するのは神である——を倒せ、即ちは殺せと言っている様にしか聞こえない。

「殺さなくても良い、ただ、その場に於いては行動不能にしてくれば構わない」

「それに、一人でやらなくちゃいけないのか？ 俺はソロで神を相手に出来る程強くは……」

『「異界の神《アガートラム》がいる以上一人では無いだろ——？」

個人面談なんて銘を打たれた夢の会話は、その確りとは理解できない台詞を最後に俺の意識を奪ったのだった。

目を覚ます、辺りを見回すが、もう見慣れた運命の歯車亭、俺が借りている部屋のベッドの上だった。

現状ですべき事、まずは情報の整理とギルドカードの更新である。

三種類に別れたと言うスキル、他にも変化が有りそうだし迷宮主が言っていた様に、対処の為もう封鎖されているかも知れない。

外での訓練になりそうだ、怪我には気を付けるとしよう。

そう言えばあの神は武器の使い勝手がどうこう言っていたと思い、得物を見ると何故か斧槍が一折り畳まれて《……》いた。

本来ならば俺の身長を越す長さを持つ斧槍だが、何処がどうなったのか、完璧に変形していた。

何の冗談か、説明書と書かれた冊子がかかっているので暇を見てと言うより、暇を作って読むとしよう。

こんな事で得物使えなくなるなんて事は無いだろうな。

冊子を片手に仲間達とギルドカードを更新する為に宿を出る。

恐らくだが、ギルド内は混雑している事だろう。

仲間達から昔の——あの教室に通っていた頃の——事を尋ねられるが、細かい事はあ

まり覚えていなかったもので、ある程度お茶を濁した会話になった。

ギルド内は予想通りで、大分混雑していた。

「……ミシエル、ギルドカード更新の受付頼んで良いか？」

「おや、ヒビキ様が行った方が宜しいのでは？」

「そうよ、リーダーなんだから」

「うん、ヒビキが行くべき」

仲間達の言だが、俺にはすぐさま解決しないとならない事がある。

「ツクヨミの奴が余計な事してな、先に何とかしないとイケないんだわ」

ヒラヒラと冊子を振って言う。

アリーシャは口下手……と言うより人見知り、ニケリアは素直だが素直過ぎる。

うちのメンバーで一番交渉やら何やらに一番向いているのはミシエルと言う事だ。

俺だってそんなに得意じゃない。

「わかりました、代わりに申請してきましょう、この混雑ですから今日中に終わるかは怪しい所ですがね」

深くは聞かないミシエルに申請を任せ、俺達は併設の酒場の四人掛けテーブルに陣取る。

何事が聞きたそうなニケリアに季節限定デザートメニューを押し付け、気を逸らさせ

冊子を開く、アリーシャも甘い物には目がないので、そちらに気を取られている。

16頁の冊子を読む限り、どうもあの変形させられた斧槍は『俺の意思』により姿を変える魔力を使わない魔具になったらしい。

基本は元々の形状である一斧槍《ハルバード》、そして斧槍に組み込まれた三つの形状、即ち一斧《アックス》、一槍《スピア》、そして少々変則的だが一鎌《サイズ》の三種類に加えて、折り畳んだ状態では右腕用の一籠手《ガントレット》、一部組み換えで一片手剣《ブレード》、刃は多少短いが一両手剣《ソード》の七種に変形するらしい。

変形は浪漫である、と書かれているが、まあ判らなくもない。

ふと顔を上げるとテーブルの上にかいパフエが乗って、うちの女性二人組が頬張っていた。

メニユーを見ればそのパフエの価格は中銅貨二枚、中々の額である。

どうやら、うちのパーティーで俺以外はそれなりに金銭的に困っていない様である。

二十話 受付／依頼

「ギルドカードの更新は明日になるようです、それとやはり迷宮は現在閉鎖中になっている様ですな」

併設の酒場でも安価で黒豆茶を飲み始めたタイミングで、ミシエルが受付を終えて戻って来る。

「明日ですか、また時間が空いてしまいましたね」

「……用事は？」

パーティー女性陣から声をかけられ、少し考えるが迷宮にも行けず、ギルドカードを通して与えられる『加護』が無ければ、飽くまでも冒険者は腕自慢程度の一般人である。故に森での狩りも少し難しい。

「そうだな——」

「ヒビキ様にギルドから連絡があるそうですよ」

「——そう言う事は先に言っただけだが、今日は自由行動だな」

連絡に苦笑して、メンバーに伝える。

何の連絡か判らんが、時間がかかるかも知れない上に狩りも出来そうに無いならば自

由で構わないだろう。

受付に連絡の件を訪ねた所、カウンター奥にある個室に通され待つ様に言われる。

紅茶とお茶受けにクッキーを出され、待つ事十分ばかり、個室の扉が開かれ眼鏡をかけた痩せぎすな男が入って来る。

彼は街の冒険者ギルドの副長、ギルド長は迷宮主がやっていると言うのは公然の秘密なので、実質ギルドの最高権力者である。

「連絡があるって聞いて来たんだが、副長が来るとはな……何の用事なんだ？」

「ああ、ヒビキさんそんな気にしないでください、空いているのが私だけだったんで」

確かに普段それなりに暇なギルドの仕事も、今回の騒動ばかりは忙しいだろう。

住人殆どがギルドカードを所持している街、更に今回はカードの表記が更新を促す表記に差し変わっていたのだから、普段更新に来ない住人もギルドに来るのだからからな。

「連絡と言うのはですね、ギルド長……いえ迷宮主からの連絡でして、どうも頼みたい事があるとか」

「迷宮主が？」

迷宮主からの依頼と言うのは、実は少なくは無い。

ギルド内にある掲示板に、迷宮外で特定のアイテムや素材を手に入れて来て欲しい等、幾つか俺も見掛けた事がある位だ。

「直接頼まれるってのは初めてだな、連絡は取れないのか？ 詳しい話を聞かんと手伝うも何も無いぞ」

冒険者にしろ、傭兵にしろ、何も聞かずに依頼を請けると言う事は自殺行為である、以前聞いた噂では何も聞かずに依頼を請けた傭兵が殆どタダ働きだったとか、王族暗殺の依頼だった等危険性が高い。

「ええ、ギルドカードを更新後に連絡が入る様になると言っていました」

「どう言う形式かは知らんが、それなら明日更新するから、請けるかどうかは連絡後に」
副長も頷き、この場での連絡は終わった。

残ったクッキーを土産にギルドを出る、さて……迷宮主の依頼か一体何をさせられるのか、それに依頼料がどれだけ出るかも問題だな。